
はじまりの物語(仮)

紺野 水透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまりの物語（仮）

【Nコード】

N3085X

【作者名】

紺野 水透

【あらすじ】

今よりも遠い遠い昔のこと。

はじまりの世界というものがありません。

それは神が創造し、楽園とは切り離れた世界。

様々な者が生きる世界。

これはそんな『はじまりの物語』。

1・僕の姫様

「ここは、とある世界のとある国。
僕が仕えるのは、その国のお姫様。」

「ねえ、悠詩」

姫様がトテトテと歩き、近付きながら僕の名を呼んだ。

「どうしました？」

優しく訊ねてみると、姫様は片目を左手で擦りながら言う。

「眠い…」

その仕草は小さな子供となんら変わりはなく、愛くるしい。とても愛くるしいのだ！

この姫様は15歳で、後数年経てばどこかに嫁ぐ歳になる。だとはいふのに、この無防備さはなんなのだろう。年相応にはとてもじゃないが見えない。

「では、お部屋に戻ってお昼寝の準備でもしましょうか？」

平静を努めて彼女に言うが、それにふるふると首を振った。

今、僕達はお城の庭にいる。姫様専用の誰も来ない庭。池もあるし木も植えてある。もちろん、草花もある。それらに囲まれるように芝生があり、その上にはテーブルとイスが用意されている。さつきまで姫様は、大人しくイスに座って花を眺めていた。

部屋に戻らないと言うのなら、どこで仮眠をとると言うのだろうか？

疑問に思っていると、急に姫様はトテテと歩き出した。目でそれを追っていくと、大きな木の根元で立ち止まり、こちらを振り向いた。

「ん…」

地面に指差し、それだけ言う。

ここに来いということだろう。それはわかる。けれど、きちんと言葉で話して欲しいものだ。

まあ、こんなところも子供の様で昔から変わらず可愛らしいのだけど……。

「どうしたのですか、お姫様。睡眠をとりたいのでしょうか？」

「ここに座って……」

僕の問いは見事に無視された。

「……姫様？」

「座って」

訝しんでも態度は変わらず、ただ同じ言葉を繰り返す。

どうやら聞く耳を持つてくれなさそうなので仕方なしにその場に座ることにした。軽くため息を吐きながら、大木に背をもたれかける。

「これでよろしいですか？」

「ん……」

姫様は言って、それからストーンと僕の隣に座った。そして……

「……またですか？」

「悪い？」

僕の脚に小さな頭を乗せて寝そべる。

「いつものこと。なのに、なんで今さらそんなことを言うの？」

眠たそうな顔で無邪気にそんなことを言う少女。本当に15歳か？と訊きたくなってしまふ。こう、もう少し異性に対して警戒したりとか……実際されたら、僕は立ち直れそうにないけど……仮にも姫様なのだからいろいろ自覚して欲しい。

「あのですね、姫様……」

「成悠」

軽い小言……いや、説明をしようとした僕の言葉を遮って、姫様は呟いた。

「わたしは成悠。“姫様”じゃない。“成悠”よ
「しかし……」

「ここに、他に人は来ない。聞かれることも無い。それでも、名を呼んでくれないの？」

悲しさが滲んだ声で姫様は言う。僕がそれに弱いのを知っていて、彼女はやってているのだろうか。

「……成悠様、もうそんな歳ではないでしょう」

「呼び捨てにして。様付けきらい。それと、歳は関係ない
いやいや、大有りです。」

そう反論したいが、この少女は聴かないだろう。きっと「だからなに？」と無表情で返されてしまう。

もちろん無視することだって出来るだろうが、相手は姫様だ。それ以前に、僕にとつてとても大切な人でもある。その人の悲しそうな顔は見たいと思えない。

だから、付き合うしか道はないのだ。

「成悠、いいですか？一国の姫様が、それもお嫁に行く歳になった女の子が男性に引く付きながら寝ていたら誤解されるんですよ。わかっていてやっています？」

「……」

「成悠、返事してください」

すー…

返事の代わりに可愛らしい寝息が聞こえてきましたよ？

狸寝入りなのでは？と言いたくなるが、本当に寝ているため何も言えない。というか、眠りにつくのも早すぎです。

「はあー……」

また、ため息を吐いてしまう。

いつつもこうなのだ、成悠は。

幼い頃からずっとこう。昼になると眠いと言い出し、葉が生い茂

った大木の下で僕の足を枕代わりにして眠りにつく。

いくら人が来ないからといって、外でこれはやめて欲しい。万が一、誰かに見られてしまった時が大変だ。

お叱りを受けるのはまだ良いが、成悠から僕を離そうとされるのは困る。僕が離れたくないというのももちろんある。僕が離れたくないというのももちろんある。けれどそんなことより、純粹で無垢な彼女が僕というちっぽけな支えを失うだけで、平穩に保っていた心を崩してしまうかもしれない可能性があることの方が怖い。

だから、それだけは避けたい。

「…成悠…」

寝ている彼女に呼びかける。当たり前だが返事は返ってこない。それでいい。深く眠れるのは、それほど安心して寝ているということだ。

そんな少女の長く柔らかい髪を優しく手でとかしながら、願う。

どうか、いつまでもこのままで……

いつか僕の手から自ら離れるまで、僕は君を守ろう。誰からも、何からも。

だから、それまでは

君の傍に居させて。

2 - 1 . 姫様と魔女。

薄桃色の花が咲く。

つい最近まで蕾だったその花はいまではすっかり咲き誇り、華やかさの中にある儂げさが見る者を魅了していた。

「あ……」

「どうしました？姫様」

食事をしている中、急に動きを止めて何か呟いた姫様。そのまま身動きをしないで一点をジッと見ている。

何があるのだろうかと思い、彼女が見る方を一緒に見てみると、ここからは薄桃色の小さな花がついた蔦が木々に巻き付いているのが見えた。遠目からだ、その花は木から咲いているように見えなくもない。

「綺麗……それとも、可愛らしい？」

変なところで悩む姫様。そんな様子に、貴女の方が何百倍も綺麗で可愛らしいですよと言いたくなる。が、もちろんそんなことは言わない。

代わりに、優しく微笑んで助言する。

「どちらでも良いと思いますよ。思うことも考えることも人それぞれです」

「…なら、悠詩は？」

「僕…ですか？」

突然の問いに、一瞬思考が止まったが、回復するとすぐに答えた。
「あの花を姫様の御髪に飾れば、さぞかしお似合いになるでしょうね」

淡く輝く銀色の髪に薄桃色の儂げで可愛い花。絶対姫様に似合うと思う。

「それは花に対しての感想じゃ、ない」

聞きたかった答えとは違ったようで、姫様はムツとした表情で僕

を見る。しかし、その頬はよく見なくては気付かないほどに淡くだが、紅に染まっていた。

その姿が実に微笑ましい。

「姫様、そんな無粋な奴の意見なんて聞いても何の得にもなりませんわよ」

姫様と楽しくお話をしていたというのに、いらぬ声が聞こえる。いつの間に部屋に入ってきたのか、気配も感じさせないまま僕の背後にそいつはいた。

「都夜、久しぶり」

驚きもせずに、姫様はその客人？を迎える。もう少し、侵入者に危機感とか嫌悪などを感じて欲しい。

一方、侵入者はそんな姫様に艶やかな笑みを向ける。

「お久しぶりですわ、姫様。今日も可愛らしく美しいお姿ですこと」
「都夜も変わらない。というか、本当に昔から変わらない」

「魔女ですから。人より寿命が長い分、老いるのが遅いだけですのサラツと衝撃的なことを言う侵入者は、本人が言った通り“魔女”である。」

名前は都夜。

幼少の頃からこいつを見ているが、姫様が言うように変わらない。美しく凜とした顔立ちも、漆黒のように黒く艶やかな髪も、その魅惑的な身体つきも、嫌みつたらしい言い方も。全て変わっていない。姫様は美しさが増していきますわね。少し前まではあどけなく可愛かったのですのに」

「…そう？よくわからない」

都夜の言葉に姫様は首を傾げる。自覚が無いだろうその仕草は、悶え死にができそうなくらい可愛い。実際僕の心の中では一回死んだ。もちろん、その死に悔いはない！むしろ、本望だ！

……と、少々取り乱してしまいました。

まあ、これには都夜も同じらしく、普段は涼やかなその顔がほんのり紅くなっていた。

「あ……。前言は撤回致しますわ」

「？」

片手で顔を隠す彼女を見ても姫様にはその理由がわからない。ただし紅くなった顔を見て、心配そうに下から覗き込んだ。

「大丈夫？都夜？」

「っ……！！」

急に至近距離で姫様のお顔を見た都夜は思わず飛び退いた。

それが逆効果だったとは知らずに姫様はまた首を傾げる。

「悠詩……。都夜は、どうしたの？」

「えーと、まあ、ほおっといってください。姫様は気にしなくても平気ですよ」

平静を装って対応している僕は偉いと思う。世話係という役職でなければ、僕も都夜と同じ行動をとっていたかもしれない。それくらい、この姫様は可愛らしいのだ。

そして天然。純天然。何も混ざり気のない彼女は、いつか本当に誰かを悶え死にさせてもおかしくはない！まあ、もちろん、人目の着く場所に連れて行く気はさらさらないが。

だって、嫌ですよ。万が一連れ出して悪い虫が寄ってきたら………考えるだけで、想像上の奴らを皆殺しにしたくなる。

「……………姫様……」

僕が想像をしていた間に都夜は自分を取り戻したらしい。若干まだ不安定であるが大丈夫だろう。

あとは姫様が追い打ちをかけなければいいけど……………なんて考えは甘かった。

「なっ！」

僕は思わず声を上げた。

都夜が急に姫様の体を抱き締めたのだ。姫様は身動き一つせず、されるがままである。

「都夜、わたし何かした？」

ただ不安そうに訊く。

もしかして、自分のせいで相手に害を及ぼしたのでは？と思って
いるのだ。

それをわかつている都夜は姫様の肩に顔を埋めたまま、首をゆっ
くり左右に振る。

「そうではないですわ。姫様が思っているようなことはありません
ん。ご安心下さいませ」

「本当に？」

「ええ。むしろ、お可愛らしくて……つい我を忘れてしまって」

「…よくわからない。けど、わたしのせい？なら、…ごめんなさい
？」

「ふふっ。やはり、姫様はお可愛らしいですわね。美しくもなって
いらっしやるのに、何故かしら…？」

優しく抱きながら、抱かれながら和やかに過ぎる時間。はたから
見たら、微笑ましい光景だろう。

だが、僕からすれば面白くない。なぜ、僕の姫様が僕以外の誰か
に抱かれなくてはいけないのだ。

「都夜様、そろそろうちの姫様から離れてくれますか？」

「っーか、さっさと離れる。」

なんて内心は隠しつつ、丁寧ににこやかに言ってみる。
な・の・に

「私達の邪魔をしないで下されます？下等生物の分際で」

都夜は何か汚らしいものを見るような目で、蔑むような口調で言
ってくる。

…死ぬ。マジ死ぬ。ってか、殺したい。

なんてこと思ってますんよー？というアピールで笑つとく。笑うのだけは得意だ。

少しばかり頬が引きつってる感はあるが、気にしない。

「都夜」

さっきまで身動き一つしなかった姫様が、急に都夜の腕から離れた。

「どうなさいました？」

不思議そうに訊ねる都夜にも姫様は返事をしなかった。

どうしたのだろうとその様子を眺めていると、次いで僕の方へ小走りで向かってくる。

ほすつと僕に頭を押し付け、両腕を腰にまいて抱きつく形。僕の胸あたりまでしかない身長のせいで、自然と姫様の顔は胸に埋まる。「どうしたのですか？姫様」

一人から殺気立った視線が突き刺さるが、軽く受け流す。代わりに、うるさいくらいに鳴る心臓の音が聞こえなきやいいなあと思いつつ、平静を努めて話しかける。

だというのに、

「…都夜、きれい」

小さな声で姫様はそんなことを言うてくださった。

2 - 2 ・ 姫様と魔女。

「都夜、きらい」

そう言ったまま、顔を隠すように僕に抱きつく姫様。

もちろん聞こえていたのだろう、嫌われた人物は半ば自失している。姫様を溺愛している彼女に、その言葉は鋭く尖った刃物のように突き刺さった。たぶん、僕が同じ言葉を言われてもあまりのショックに茫然としていたと思う。そんな自信がある。

まあ、都夜に同情する気は全くないですけどね。

それでも

「どうしてですか？」

聞いてやらねばいけない。

姫様が人を無闇に嫌うような人間になってほしくないという世話係としての思いと、純粹に彼女が人に……それも都夜に「きらい」と言うのが珍しいからだ。

姫様はぎゅっと抱きついたまま呟く。

「悠詩は悠詩。かとうせいぶつ、なんて名前じゃない。悠詩の名前間違ったからきらい」

まるで駄々っ子のように拗ねる姿も可愛らしい。

なんでしよう、この子。なに言ってくれるんだろ！出来れば、思いつき切り抱き締めたいです！

…おおっと。僕も危うく我を忘れるところでした。

だって、僕のために姫様が都夜に「きらい」と仰ってくれたのですよ！？そりゃあ、少しぐらいタガが外れそうになりますさっ！

見た目は普通に内心はテンションが上がっている僕に反比例して、嫌われた人のテンションは見た目で判るほどに落ちていく。

「きらい……姫、様が…嫌いって……。私のことを……きらい、いっ

て…」

ああ、ウザい。

陰鬱な空気を撒き散らしながら、都夜は途切れ途切れ言葉を口に
する。

もちろん姫様は顔を埋めたまま、彼女の方なんて見向きもしない。
そんな2人を見て、僕は気付かれないようにため息を一つ吐いた。
個人的には放っておきたいのだが、そうもいかない。ずっとこんな
調子のまま都夜に居られても困る。それに、この陰鬱な空気を何と
かしたい。姫様に悪影響だ。

だから

嫌だけど、僕が一肌脱いであげるしかない。

「…姫様」

「なに…？」

「都夜様を許してあげてください」

「…イヤ」

少し怒り口調で呟く姫様。

うーん、こうなった姫様ってメンド…いや、大変なんだよね。

あんまり言い過ぎると、意地張っちゃうから。

仕方がない、ここは何かでつろうか…

「姫様…」

「イヤ」

まだ言っていないのに即答だよ。どうしよ？

これは結構怒ってる、のかな？僕のために？都夜が僕のこと下等
生物とか言ったから？…もしそうなら、やっぱり嬉しい。

「成悠」

自然と優しく彼女の名を呼ぶ。不意打ちを受けた成悠は、ピクツ
と体を揺らした。僕から名前を呼ぶことがこの頃なかったからかな

り驚いただろう。

わかってるけど、知らぬふりをした。

「成悠、僕は気にしていません。ですから、都夜を許してあげてはくれませんか？」

「……」

「お願いです。許してあげてください」

「……」

僕の胸に顔を埋めたままの成悠。決して無視しているわけではない。こう見えて、彼女なりにちゃんと考えているのだ。

その証拠に……ほら、少ししたら顔を上げた。

「けど、悠詩が蔑まれるのはイヤ」

ムツとした口調で、けれど少し悲しそうな目で僕を見る。捉えて離さないその目の色は髪よりも少し薄く、銀色というか灰色に近いかもしれない。透明っぽくて綺麗な瞳。全てにおいて色が薄い彼女だが、無駄に強い想いと意志を持っている。

「なら、そう言わないでとしっかり伝えればいいでしょう？ さっきも言いましたけど、僕は気にしていません。ですから、後は成悠次第ですよ」

「……」

成悠はまた黙りしてしまった。

暫くの沈黙後、微かな温もりが離れていく。それは彼女が僕から離れたから。

「都夜」

未だ沈んだままの都夜に、姫様は声をかける。感情を消した声で。……ひめさま？

呼ばれた方は、少し色の戻った目で姫様を見た。それからハツキリと姫様は言う。

「都夜、嫌い」

「…はい」

断言されては、都夜も返せる言葉がそれしかない。死刑宣告を受けた咎人のように、ただうなだれる。

だが、そんなこと気にせずには姫様は言葉を続ける。

「都夜なんて、嫌い。けど、好き。悠詩の名前、間違えないようにするなら、また好きになる」

「…それは…」

「だめ？」

気が付けば、いつもの姫様の声。それを聞いて都夜はすぐに首を振る。

「いいえ。以後、気をつけますわ」

ゆっくりと歩いて都夜のもとへと近づいていく。そして、今度は姫様の方が彼女に抱きついた。

「じゃあ、好き」

「私も姫様をお慕いしていますわ」

嬉しそうに抱きつく姫様と幸せそうに顔を綻ばせる都夜。言っちゃなんだけど、母と子の抱擁にも見えなくもない。ある程度の誤差はあるだろうが、お互いを想う気持ちは似たものなのだろう。

けどやっぱり、僕からすれば面白くない。そりゃあもう、とてつもなく。

だからといって、僕だって自分の我が儘を通すだけの子供じゃない。邪魔はしないさ。うん。しない。したくないんだけど……

「そろそろ離れてくれませんか？」

さすがにずっと待てるほど、僕の心は広くはないのです。

3 - 1 姫様と婚約者

「よお。成悠」

雨降る昼下がりに。珍しく部屋の中にいた姫様のもとに、一人のお客様がやって来た。

それまで窓から外を眺めていた姫様は、ゆっくりと客人の方を見る。視界に捉えた瞬間、動きを止めて「じー」と彼を見た。

どうしたのでしょうか。姫様は微動だにせず、部屋に入ってきてあいさつをした青年をただ「じー」と見ているのだ。まるで、知らない何かを見る子供のように。

そして数秒後

「…だれ？」

首を傾げてそう言ってくださった。

その仕草はいつも通り可愛らしい。抱き締めたくなるくらい可愛らしい。……可愛らしいんですけど……

「……自分の婚約者くらい覚えていてください、姫様」

さすがに婚約者ことを忘れてしまわれるのは問題です。下手したら国際問題にもなってしまう。

人の気も知らない姫様は、僕の方に顔を向けてキツパリと言う。

「めんどくさいから、イヤ」

イヤ、じゃありません。ちゃんと覚えておいてくれないと困ります。

「んー、せめて本人がいない時に言ってくれないかなあ。脈無しだつて知ってても、さすがに堪えるぞ？」

ほら、忘れ去られてしまった婚約者様が苦笑いをしているではありませんか。僕には「ご愁傷様」としか言いようがないです。どうしてくれるんですか！フォロワーなんて出来ませんよ！

……半分くらいは、ザマーミロとか思ってたたりしなくもないですけどね。もちろん「ご愁傷様」もにこやかに言ってますよ。

僕の心の叫びも黒い声も聞こえていない婚約者様……改め、久炉様は目尻を若干下げて姫様を見ている。

「相変わらずだな、成悠は」

なんだかしみじみと、妹を見る兄みたいな穏やかな顔で言う久炉様。こんなことで懐かしそうにして欲しくはないけど、仕方がないですね。ないですよね！

……紹介が遅れました。姫様の婚約者様のお名前は久炉様。当たり前かもしれないですけど、他国の王子様です。歳は姫様の三つ上で、やんちゃな所は残っているけどちゃんと立派な王子をやっていく。素は子供っぽいけど、外では落ち着いていて賢い王子様。国民からの人望だつて厚い。

そんなお方が自分の婚約者に「だれ？」とか言われたのです。個人的には嬉しいけど、お世話係としては申し訳ない限りです……。

彼は優しい目で姫様を見る。まるで実妹を見ているような和やかな雰囲気です。

その様子を見ていて、ふと思ひ出すことがあった。

「そういえば、珍しいですね。久炉様がこんなに長い間、姫様に会いに来なかったなんて」

形だけの婚約者とはいえ、マメな王子様は週に一回程は姫様の元へ来ていた。だというのに、彼を最後に見たのはひと月前だったような気がする。

僕の質問に、久炉様は何か濁すような言葉で答えた。

「まあ……いろいろあつてな」

将来は一国を担うことになる王子だ。いろいろあるのは仕方がないだろう。

けど

「あまりご無理をなさらないように。報告は後で伺います」

「ハハッ、手厳しいな」

乾いた声で笑う久炉様。何が手厳しいのでしょうかね？

情報はきちんと聞かなくては命とりになる。例え、些細なものでもそれは同じ。まわりからは些細と言われたものでも、自分達にはどういふものになるのかわからないのが“情報”というものだと僕は思っている。

「…ところで、悠詩」

急に茶目つ気が入った顔で僕を見る。やめて欲しいです、その顔別に僕はそんな趣味は持ち合わせていないので、そんな目で見られても可愛いなどと思いませんし、トキメキません。むしろ、嫌な予感しかしないです。

「なんでしようか、久炉様？」

「んー？その敬語と様付け、なんとかなんねえのか？」

「僕はしがない使用人ですよ？一国の王子相手に呼び捨てなんてとんでもない」

「いつつも呼び捨てだし、バカ王子とか言うくせに？」

「姫様の手前、そんな下品な言い方はしませんよー」

「うわー、とぼけもしなきゃ、弁解も無しかよ……」

疲れたようなその表情に、僕はにっこりと笑みを返してやる。

当たり前じゃないですか。可愛い可愛い姫様には悪い言葉遣いは覚えてほしくないですからね！

「…幼女趣味」

「ああ？何か言いやがりましたか、久炉様？」

「なっなんか、微妙に言葉遣い混ざってて恐えんだけど……」

彼の頬が何故か引きつる。

失礼ですよ、人に向かって恐いだなんて。それに、姫様に向かって幼女だなんて。身なりはこんなんでも、今年で立派に十六になりますっ！

「…両方共、ヒドい」

不機嫌丸分かりの顔と声音で姫様が言った。その声は大きいわけでも、極端に低いわけでもないのに、何故か寒気がする。

「どつどつし、ました？」

「幼いつて言った」

責めるような口調で言い、僕を睨みつける姫様。

「かつ可愛い……はずなのに、少し怖いですよ……？」

「幼い女といったのは久炉様で、決して僕ではありませんよ？」

「悠詩も、言っていないけど思ったでしょ」

わー。怖いですよー。なんで僕の考えを読んでるんですかつ。

「ウソは駄目」

「いや、姫様……？」

「ごめんなさい、は？」

「……ごめんなさい」

つい迫力に圧されて謝ってしまう。だって恐いんですよ。何故か恐いんですよ。

けれど幸い、謝ったおかげか姫様は機嫌を直してくれた。「ん」

と言いながら満足気な顔をする。

子供っぽいのはうちのお姫様もだけど、そこがまた可愛らしいのです。素直でいいですね。

どこかの久炉とかいう馬鹿王子様と違って。

3 - 2 ・ 姫様と婚約者。

半ば蚊帳の外にされてしまった久炉様は、おずおずと姫様に話しかけた。

「成悠…？」

「なに」

決して本人は見ずに冷たい声で答える姫様は、やっぱり少し怖い。意外と迫力出るものですね。

「…怒ってるか？」

「怒ってる」

即答で返す姫様はまさに不機嫌です！といった感じだ。早く謝っておいて正解だったかもしれない。

たじたじな久炉様を見つつ、僕は自分がした判断は正しかったと内心褒め称えた。

「悪かったって。別にお前に対して言ったわけじゃあねえんだ。ちよつと悠詩をからかいたくて……」

「けど、わたしを指した言葉だったんじゃないの？」

「いやー……」

「意味のない弁解はきらい。ごめんなさいって、一言いえばいいのに」

フンツと姫様がそっぽを向く。久炉様は参った感じのため息を吐く。

言ったのは確かなのだから、さっさと謝ってしまえばいいのに。

そう思いながら、呆れた視線を久炉様に送る。この王子様は謝ることがどうも苦手らしくて、いつもこんな感じだろうだするのだ。見ていて一発殴りたくなるが、姫様の手前、そんなことも出来るはずもない。

「…ごめん。悪かったよ」

黙りをしてから数秒して、やっとで久炉様は謝罪を口にした。すまなそうな顔をしながら、そっぽを向いたままの姫様を見る。そんな彼をチラッと見やってから、聞こえるか聞こえないかの声で言う。「…許す」

姫様から許してもらおうことができ、安堵する久炉様。けれど、そんな気持ちもあつという間に消え去った。「けど…」と姫様が言葉を続ける。

「また言ったら、都夜に言いつけるから」
「！」

一瞬、久炉様の動きが止まった。姫様の一言は彼に大打撃を与えるものだった。

「えーと…成悠、さん？何を……」

「都夜に言いつけるから」

「あ、のー……」

しどろもどろの久炉様に、姫様は繰り返す。

「言ったら、都夜に言いつける。言わなかったら、言いつけない。わかったか？」

「…はい」

反論することなく、久炉様は頷く。頷くしかないのだ。

都夜は姫様を溺愛している。そんな彼女に姫様が告げ口した場合、久炉様はお仕置きをされるだろう。得体の知らない魔法というものを使う魔女。ただの人間である久炉様はそれに抗える筈もない。

「…まあまあ、姫様。それくらいにしてあげてください」

さすがに可哀想になって僕は声をかけた。彼が都夜に告げ口をされたくないもう一つの理由を考えると、これ以上言うのは可哀想以外のなにものでもない。

僕の言葉に姫様はコクンと頷く。

「わかった」

そんな彼女が可愛くて、つい抱き締めたくなくなってしまふ。

ダメダメ。僕はあくまで姫様の世話係であって、婚約者とかじゃないんだから。

心の中でそう言い聞かせる。自分で自分を諫めるのも馴れたものだ。日頃から暴走しないように自制しているから、そのお陰かもしれない。

頃を見計らって、僕は口を開く。

「姫様、少し席を外してもよろしいですか？」

「どうして…？」

急に不安げな表情になる姫様。そんな顔を見たら、ずっと側にいたくなってしまう。

「久炉様と大切なお話があるのです。退出の許可をいただけますか？」

「……」

「帰ってきたらたくさん遊びますから」

「……わかった」

数拍置いて渋々承諾してくださった。顔を伏せてしまっていて表情は窺うことはできなかったが、きつと寂しげな目をしていることだろう。

申し訳ない気持ちがあるものの、ここで甘やかしてはいけない。

それは姫様へ対してもだが、自分に対してもだ。

「久炉様も少しの間付き合ってくださいます。もちろん、よろしいですよ」

「訊く気無いだろ。ほぼ断言じゃねーか。…別にいいけどさ」

しよぼくれる久炉様を軽く流して、姫様を見る。まだ下を向いてしまっているが、挨拶をする。

「では、いつてきますね」

「…悠詩」

ドアノブに手をかけたとき、姫様が僕の名前を呼んだ。見ると、

伏せてあつた顔が上げられていて、薄い灰色の瞳が僕を見つめていた。

「どうしました？」

訊いてみても直ぐには応えてはくれなくて、少しの間沈黙が空間を支配した。

そして

「いつてらっしやい」

僕に心配をかけないようにするためか、軽く笑って言ってくれる。その表情が、そんな顔をさせるのが少し痛くて……、けれど僕もいつも通り微笑んで返事をする。

「はい。いつてきます、姫様」

そうして部屋を後にした。

余談

「…大袈裟じゃねえか？」

部屋を出てすぐ、久炉様があからさまに呆れた声でそんなことを口にしたが

「…げふうっ！」

みぞおちを強打して、黙らせておいた。

口にしないほうがいい言葉はこの世にたくさんあるですよ、久炉様？

4・世話係と婚約者様

「それで？何があつたんですか、久炉」

「…お前、本当に成悠の前と俺の前で態度違うよな」
「なにが良くなかつたのか、久炉はジト目で見てくる。」

「ここはお城の中の一室。一応与えられている自室と言つ各の空き部屋に僕達はいた。」

「お前…、ですか。たしか姫様のこともそのように呼んでましたね」
「僕のその言葉に、久炉はビクリと体を揺らす。おかしいですね。」

「僕は笑っているというのに。何に怯えているのでしょうか。」

「どうしたのですか？久炉様」

「っ！わっわかつたから。悪かつたの俺だから！その笑いやめてくれっ！」

ヒステリック気味に久炉が騒ぐ。仮にも一国の王子なんだから、もう少し落ち着いてほしいです。みつともない。

「ハイハイ。…全く、僕が何したと言うんですか。そんなに怯えてため息混じりに言つと、久炉様は恨めしげな目で見てきた。」

「今まで散々してきたじゃねーか。しかも、笑いながら。骨折させられたのも、縄で逆さ吊りにされたのも、一週間意識不明にされたのも……忘れてねえぞ」

「なあに言っているんですか。あんまりうるさいと、その口縫いますよ？」

「だから、笑いながら言つなっつーにつっ！」

軽く半泣きで叫ぶ久炉。情けないですよー。一国の王子が自分より年下の従者に怯えるなんて。

確かに、訓練と称して骨を折つてみたり、姫様に対しての言葉遣いが悪かつたら縄で縛つて宙吊りにしたりしましたけど……大したことないですよね？

「まったく、冗談ですよ。さすがにそんなことはしません」

「…糸と針を持ちながら言っても説得力ねえって…」

「やりませんってば。縫ってしまったら“情報”を聞けないでしょう。まあ、話す気が無いなら縫ってもいいですよ」

「そういう問題っ!?!」

当たり前じゃないですか。じゃなきゃ、何のためにわざわざ姫様から離れてまで久炉と話をするとこののです。

「…まあ、今に始まったことじゃねえしな…」

「そうですよ」

「開き直んなっつ!」

うるさいですねえ。認めて何が悪いのですか。面倒くさいのは嫌いなんです。

「そろそろお話を聞きたいんですけど。早くしてくれませんか。じやなきゃ、困るのはあなたの方ですよ」

僕がそういった瞬間、久炉様の体がピタリと動きを止めた。息を詰まらせ、顔を若干青ざめさせている。

動きも言葉も無くして数秒後、真剣な顔つきで久炉様は話し始めた。

僕にとって、とてつもなく面白くない話を。

*

部屋に戻った僕をわざわざ姫様は迎えてくれた。

「ゆたっ!」

トテテテと走って飛びついてくるその人を優しく受け止める。可愛い可愛い僕のお姫様。本当は抱き締めたいけれど、我慢しなくてはいけない。

「只今戻りました」

「おかえりなさい、悠詩」

顔を僕に埋めたまま“おかえりなさい”を言ってくれ。それがとても嬉しい。すぐに離れてしまおうのだろうと思い、その幸せを密かに噛みしめていた。

けれど、それからしばらくしても姫様は僕に抱きついたまま離れなかった。

「…姫様？」

心配になって名前を呼んでみると、少ししてポツリと呟いた。

「久炉とのお話、なんだったの…？」

不安そうなお話、少し痛い。心配はさせたくはないのだけれど、なんて思いながら苦笑する。

「姫様は気にしなくて平気ですよ。大したことない、他愛もないお話でしたから」

「…けど、不思議。怒ってるのに泣いてる。悲しんでる」

まるで独り言のように言葉を紡ぐ姫様。

それを聞いて、僕は姫様の手を自分の腰からほどき彼女の目を見る。そして「ああ、用心しておけば良かった」と反省する。…もう遅いけど。

「姫様、感情を勝手に読まないでください」

「だって…きこえる」

悪びれずにボンヤリした調子で姫様が言う。きつと無意識に力を使ったのだろう。虚ろな目がその証拠だ。

そして、強い力は使った人自身の身に負担をかける。

「…ゆ、た…」

僕の名を呼んだと思ったら、急に体の力が抜け、人形の糸が切れた様に

カタンッ

と体が崩れた。

それを反射的に受け止める。もちろんどこも打ちつけることもな

く、僕の腕の中に姫様の体が収まっている。

「おやすみなさい、姫様」

眠りについた姫様を壊れ物を扱うように優しくそっと抱きしめながら、僕はそう呟いた。

愛しい愛しい僕の姫様。

ベッドに寝かせた後、脇にある椅子に腰掛ける。そして眠る姫様を見つめながら、さっきまで一緒にいた久炉との話を思い出す。とても面白くない世間話。

*

「またこの頃、巫女狩りが増える」

俯いた久炉が何かに耐えるように言葉を吐き出す。その様子を静観しながら、僕は口を開く。

「…巫女狩り、ですか」

「ああ。各国の巫女たちが何者か達に攫われている。攫われた巫女は生きて連れ戻される者もあるが……」

「殺される者もいるのですね」

久炉が言い淀んだその言葉をサラツと僕が言うと、彼は苦々しい顔で「そうだ」と頷く。悔しそうで辛そうな顔がまる見えである。もっと表情を隠す力を身につけた方が良かったらうなとか考えながら、彼の性格や性分を思い出す。

彼は少しばかり純真過ぎる。一国を担う王子だ。血なんて幾らでも見ることになるだろう。なのに、死に対することに弱すぎる。ただ言葉にするのを躊躇うし、自ら誰かの命を消し去ることをしない。いや、彼には出来ないだろう。臆病なのかもしれない。怖がり

なのかもしれない。もしかしたら、人が良すぎるせいかもしれないけれど、そんなことばかりで楯なんて造れるはずがないし、久炉の問題であつて僕には関係ない。だから僕は気にせず彼の嫌いな言葉だろつと、必要なら口にする。正確な情報を知るためにだ。

「巫女攫いは数年前にその組織を潰したはずですが？」

前に起きたものは、巫女の力に惹かれた輩が、それを自分の思う通りに使いたいという欲に駆られたためにあつた事件だ。

この世界の巫女は神を祀り、祈り、そして力の一部分を授かる。力といつても様々で、大きく三つに分けられている。

一つは天。風や光の能力に長けている。

二つ目は地。植物や地中の動きなど。

火と水などもあるが、その細かな力の種類で天か地に分けられる共通な力である。

そして三つ目は人。字の如く、人というものに関してだ。

特別な巫女の力。それを手に入れようとした馬鹿な輩がいた。各地から巫女を攫い、人体実験などを行ったバカ共が。おかげでその年は巫女たちがほぼ死んでしまい、早々に代替わりを強いられた。

けれど、そいつらの息の根は全て止めたはずだ。まだ生き残りがいるとは思えない。

すると久炉が「違う」と否定する。

「前にやった奴らは全滅している。今回はまた新しい派だ」

「学習しませんね。人間つて。一つ潰しても、また一つ増える」

これではいつまで経つても、いたちごつこのように終わらない。

犠牲が増える一方で、自分達すら追い詰めているということに気が付かないのでしょうか。やっぱり醜いな、欲が強い人間は。

冷めた目で見ている僕の思考がなんとなくわかつたのだろう。やりきれなさそうな顔で久炉は言う。

「違うのは派だけじゃない。目的もだ」

「目的…？」

巫女の力の私的利用ではないというのか。……では、何のために？

疑問が疑問のまま渦巻いていた方が良かったかもしれない。その方が幾分気が楽だ。

なのに、思いついてしまった。巫女狩りの目的、一つの可能性を

……

「今回は……」

ああ、嫌だ。勘違いであってほしい。聞きたくない。言わないでくれ。言つな。

渦のように感情や言葉が僕を飲み込み支配する。少しでも気を許したら、思っていることを全て子供の吐き出しそうだった。

その中、僕の内情なんか知らない久炉は言葉を続ける。一番聞きたくない言葉を、彼は口にするのだ。

「“巫”ではなく“神”。本当の狙いは“神子”だ」

5 - 1 ・神子と巫女と姫様

むかしむかし、神様は色々なモノをつくり出しました。

まず土を地面をつくり、その次は水、草や木などの植物と呼ばれるもの、獣、天使、そして人間。生活というものができる環境をつくり、それらを住まわせてみました。

少しして、仲良く共存しているそれらを見て大丈夫だと思った神様は、自らの住む楽園から切り離し、一つの世界をつくりました。

全てが共存し生きる世界。

神様が創造し、最初につくった世界。

そこは“はじまりの世界”と呼ばれています。

それは古の物語。

この世界は神がつくり、そして今も自分達を見守ってくださいといるという言い伝え。

*

神が見守っていると言われるこの世界には“巫女”がいる。

巫女は神を祀り、仕え……特殊な力を分けてもらう。その力は私欲のためには使えず、この世界のために使われる。立場的に神に近い者であり、たくさんある中の一つの能力の守り人みたいな役割だ。能力の数ほど巫女はいて、正確な人数はわかっていない。しかし、きちんと存在が確認されているのが“巫女”である。

一方、今では伝説と化し、いるかどうかも定かではない“みこ”もいる。

神の子である“神子”がそうだ。この世界が出来てかなりの歳月が経っている今、神子はもういないとされている。

…しかしそれは、人間にだけのこと。人間でも、王位にあるもの達や天使、魔女、獣など…取り締まる者や人間の枠外にいるものは全て知っている。

“神子”は今の世もいることを。

*

日もとつくに空から消えた時刻。

真つ暗な部屋の中、窓からさす月の明かりが眠る姫様の顔をうつすらと照らす。微かな光がより彼女の存在を儚く見せた。

「…姫様、お目覚めになりましたか」

いつの間にか開かれていた目を見て、僕はそう声をかけた。

寝ぼけているのだろう。その瞳はまだ完全に開いていなければ、光が差しているようにも見えない。ボンヤリと天井を見ていた。

どれくらいの間、そうしていたのか。たぶん数秒、数十秒くらいだと思う。姫様は幾度か瞬きをして、やっと僕を見た。

「悠詩…？」

「どうなされましたか？」

「……お腹空いた」

起きて最初の言葉がそれですか。シリアスぶち壊しですね。しかも、お姫様が軽々しく言うような言葉でもないですよ。自重してください。

なんて言えるはずもなく

「朝まで待てませんか？」

「待てない」

一応訊いてみたら即効で返ってきました。

「…そうですね」

軽く呆れた返事をしてから、そういえば夕飯を食べていないということを思い出す。

おやつも食べないはずだし、最後に食事を取ったのは昼時だ。毎日三食おやつ付を姫様はきっちり食べている。しかも完食。そりゃあ、お腹も空くはずだ。

「軽食でも……」

持ってきてみましょうか？と言おうとしてふと思う。

…厨はやっているだろうか。

只今の時刻は真夜中に位置します。見回り兵以外はとつと皆寝ている時間です。叩き起こしてもいいけど、後からグチグチと文句を言われるのは面白くない。

さて、どうしようか。

言いかけたまま暫く悩んでいると、姫様が唐突に口を開いた。

「悠詩が作ればいい」

……はい？

「ぼつ僕が姫様の食事をですかっ!？」

一体いきなり何を言い出すのですかっ？一瞬、空耳でも聞こえたのかと思いましたよ!

…声が大きい。もう夜でしょ？迷惑になる」

若干眉を顰めて姫様が言う。珍しく常識的な言葉に、「ごもつともです」としか言えない。

……まあ、部屋は防音になっているため実際に周りに音が漏れているかどうかといたら、ほぼありえないことに等しいのだが……気にしちゃダメだと思う。なにより、姫様の言葉自体は正しいし。けれど、僕が料理を作るかどうかというのはまた別の話だ。

「いや、姫様……？」

「なに？」

「僕がここを離れるのはちょっと……」

「なぜ？」

「姫様を一人にするわけにはいきません」

「なんで？」

「危ないからです」

「どうして？」

「……」

「なんででしょう。この押し問答みたいなの。いつまで経っても終わりが見えないのですが……」。

「悠詩？」

「返事をしない僕に対して、不思議そうな顔をしながら首を傾げて僕を見る姫様。その顔とその仕草とその目は反則です。」

「……わかりました。作ってきます」

結局、僕の方が折れた。

それ以外にどうしろと？もちろん、姫様を放っておくという選択肢は無いですよ。いつまでも続くだろうこの会話を終わらせるには、僕が折れることが一番早いと思います。

5 - 2 ・神子と巫女と姫様

扉を肩で押さえながら部屋に入った。

「お待たせしました、姫様」

台車で押してくるわけにもいかず、右手に皿を左手にポットと力ツプといった格好になっている。行儀が悪いけど気にしてられませんが…。なんのイジメなのか、お盆が無かったのですよ。

一方、行儀など気にしない姫様は、僕の行動に文句をつけない代わりに、目を輝かせて右手を……。正確には皿を見ている。

お皿の上に鎮座するのは野菜やハムをパンで挟んだもの。軽食に丁度いいだろうと思ったのと、作るのが比較的楽なのでこれにした。それを食い入るように姫様は見る。

……。キラキラした眩しい目で見つめて下さるのは嬉しいのですが、それが食べ物に対してというのは姫様として些か問題です。

「紅茶を淹れますから、少しお待ちくださいね」

「いただきます」

テーブルに皿を置いた途端に小さな手が伸びてきて、上に乗ったパンを掴んだ。そしてあつという間に咀嚼して飲み込む。紅茶を淹れるヒマすらくれませんでした。

「…かなりお腹が空いていたようですね…」

もう、呆れ通り越して凄いとしか思いませんよ。なんですか、その早さ。いつつもそんなに俊敏ではないじゃないですか！

なんて心の中で叫んでるとはおくびも顔には出さないようにし、とりあえず紅茶を淹れる。

食事と共にと思っていたその紅茶は食後の一服のようになってしまった。…まあ、いいんですけどね。どうせ食後にももう一度淹れる予定でしたし……。いいんですよ。うん。いいんです。

「おいしい」

紅茶をすすりながらそう言う姫様の顔はなんとも可愛らしいもの

だった。普段の無表情が嘘のように、嬉しそうに笑っていた。そんな顔を見せられたら、文句も説教も何も言えませんがよ。

「姫様は、本当に美味しそうに食べてくださいますね」

行動で態度でその時の姫様の気持ちがわかる。顔だけを見ていたら、きつとわかる人はそうそういないだろう。それくらい、彼女の表情は乏しい。

けれど食事をするときだけは、その顔が和らぐ。見ている者まで心温まるような笑みがこぼれるのだ。

「悠詩の料理はおいしいから」

姫様は事も無げにそう言う。

“僕の料理”はおいしい。作った僕としてはこれ以上無いくらいに嬉しい言葉。

けれど

「そんな言葉、余所で言わないでくださいね。厨の者達が泣きますよ」

それは僕が作った料理以外は美味しくないと言っているのと同類である。専門職の方達より素人の料理の方が美味しいなんて言われた日には……、彼らの反応が面倒くさそうなので考えたくもありません。

「わかった」

素直に頷く姫様。

聞き分けがいいって素晴らしいですね。さつきもそうだったら嬉しかったのですけど。無理、でしょう。諦めが肝心ですよ、うん。それでもやっぱりジト目で姫様を見てしまいます。仕方がないで片してください。

ジト目で見られている姫様は、空になったカップを置いた後もぼんやりとした様子で窓の外を眺めていた。

「眠らないのですか？」

「……うん」

僕の問いに姫様は小さく頷く。

子供っぽい彼女は食事をとった後、必ずと言っていいほどすぐ眠りについてしまう。子供というか、行動的には赤ちゃんの方が近いと思う方もいるかもしれませんが、気にしないでください。というか、気にしちやいけません。

…少し話が逸れました。とりあえずそんな姫様が珍しく起きています。それも眠たそうな素振りも見せないで。

「怖い夢でも見たのですか？」

その問いに、数拍の沈黙があったものの「うん」という返事が返ってきた。

「ひとりになる夢を見たの」

「ひとり、ですか」

コクンと弱々しく頷く姫様はその後もお話してくれた。

「気付いたら、誰もいなくなってるの。どこを探しても見つからない。ひとりぼっちで……巫女たちが泣いているのが見えるの。わたしの手を伸ばしても彼女たちには届かなくて、ひとりでそれを見るしかなかった」

夢の中のお話に思い当たる節があつて、危うく反応するところだった。

なんとか悟られないよう平静を装い、姫様に優しく言う。

「僕はお傍にいますよ。決して貴女の傍から離れたりしません」

何も映していない虚ろな目を覗き込みながら、軽く微笑む。彼女が安心してくれるように。

すると、だんだんと光を戻してきた目が僕に向けられる。そして、縋るような目をして口を開いた。

「絶対？」

「それが、僕の“誓い”ですから」

決して彼女の目から逸らさずにしっかりと見つめる。

信じてくれたのだろうか。まだ少し不安そうな顔をしつつも、「わかった」と呟いた。その言葉に僕は安堵する。

「今日はもう寝ましよう？そうしないと、また明日の朝食をとらないことになってしまいかもしれませんよ」

コクリと頷いた姫様は寝台に向かう。布団に横になったのを見て、僕は掛け布団を掛ける。首もとまで布団に埋もれさせると、姫様は片手を僕に差し出して言った。

「手、握ってくれる？」

珍しく訊ねる口調のその言葉。

心細い気持ちが悪そうに声に混じっている。それを察した僕は特に文句も言わずに差し出された手を握った。

小さくて細い華奢な手。壊れ物を扱うように優しく握り締める。

安心したのだろう姫様は、軽く微笑んでから目を閉じた。

彼女の部屋は城の奥深く。人の目を盗むようにある場所。

そこに隠された姫君は、皆が欲しがる神の愛娘。

伝説であったはずの“神子”はこの世に、王族として産み落とされた。

だから一生、籠の鳥。

“神子”として産まれたばかりに、彼女は姫として外を出ることとは許されない。

「…成悠」

呟いて、僕は小さな手を両手で包み込む。そして祈るように額をつけた。

穏やかで優しい日々を彼女に。

叶わないとわかっている願いを、それでも僕は願うしかなかった。

5 - 2 ・神子と巫女と姫様（後書き）

もし、見てくださっている方がいらしたら……のつもりで書かせていただきます。

ずいぶん遅い気がしますが、はじめましてです。

突然ですが、登場人物紹介 なんてものを後書き部分を使って書いていこうかな？なんて思っています。作者の気まぐれかと言われるら否定できません。代わりに開き直っちゃいます。

内容としては……そのまんまですが、主要人物やただの登場人物など、様々な人物の紹介をしていくつもりです。

とりあえず、次回から一人ずつ紹介させていただきます。まずは成悠からですかね？たぶん。

なんだか長い後書きですみません。

読んでくださった方、くださっている方々に感謝です。ありがとうございます。

未熟者が書いた未熟な作品ですが、この先も読んでいただけたら幸いです。よろしく願います。

6 - 1 ・朝食の場

「神子が狙われている」

聞きたくない。

「だから、いずれは彼女に手伝ってもらうことになると思う」

黙れ。

「成悠は大切だ。けど…」

それ以上言うな。

「俺達は、“成悠”より“神子”である彼女の存在の方が大きくて、必要としているということ否定できない」

僕の姫様は、成悠は、彼女は

人間の道具じゃない。

「…っ！」

怒りの感情と共に意識が浮上した。

さきつまで見ていた映像と目の前の景色が違うことには直ぐに気が付き、強ばっていた身体の力を抜いた。

眠っている姫様の手は僕の手に収まっている。どうやら、あのまま寝てしまったらしい。

「情けないですね。僕も」

苦笑しながら自嘲気味に呟く。

いくら夢見が良くなかったとはいえ、夢と現が一瞬混じった錯覚をおこすなんて恥以外のなにものでもない。せめて声を上げていなくて良かったと胸をなで下ろす。

「…ゆた」

ベットの枕元を見ると、うつすら目を開けた姫様が僕を見ていた。

「おはようございます、姫様。起こしてしまいましたか？」

「悠詩のせいじゃない。自分で起きれた」

言って姫様は体を起こそうとする。それを僕は触れるように手をかけて押し留めた。

「いきなり起き上がったては倒れてしまいます。どうか、完全に目が覚めるまでお待ちください」

普段、低血圧な姫様は起きるのに時間がかかる。いかにも、まだ目が覚めきっていません。という今の状態で起き上がったりしたら大変だ。倒れる可能性が無いと言い切れない。

少し苦い表情をした姫様はそれでも素直にコクリと頷いてくれた。本当は起き上がりたいのだろうが、前に無理してぶっ倒れたことがあるため自重してくれたようだ。

それに苦笑しながら、言い聞かせる。

「気をつけてくださいね。お怪我をされたら困りますから」

「悠詩」

名前を呼ぶと同時に、急に差し出された手は僕の袖を掴んだ。そのことに少し胸が鳴ったのは否定できない。

「朝食、久炉と食べたい。出来れば都夜も」

悪気はないのでしょうか。わかっています。わかっていますとも。

…さっきの胸の高鳴りを返してほしい。
そう思うのは許していただきたいです。

「……姫様」

「なに？」

「出来れば、考え直していただきたいのですが……」

「イヤ」

ですよね……。なんとか抵抗しようと思ったのですが駄目でした。
せつかくの姫様と二人きりの時間に、他の方の介入は勘弁して欲
しかったんですけどね。特に都夜とか都夜とか都夜とか都夜様と
か魔女とか……。姫様に抱きついたら今度こそ殺し……。ゲフンゲフ
ン。引き離したくなったりするんです。

けど

「だめ？」

とか、ただでさえ愛しい姫様に可愛らしい目で見つめられたら反
論出来なくなりますよ。

無視したら当分お話ししてくださらなくなりそうですし……。

「駄目ではありません。一応、久炉様には声をかけておきますね」
結局承諾するしかなかった。だって、自分の独占欲のせいで二人
を呼ばないとか馬鹿みたいですからね。

「よろしく」

そう言っ僕を送り出す姫様。その顔が少し嬉しそうだったから、
良いことにしましょう。うん。

重い足取りを少しでも軽くする要素を見いだしながら、部屋を出
るのだった。

*

「…あのさ、悠詩」

「なんでしょうか？久炉様」

「降りてくれない？」

顔が若干青くなっている久炉様にニツコリと笑って見せた。

「嫌です」

「……」

それっきり久炉様は黙り込んでしまわれた。

姫様に言われた通り、僕は久炉様を呼びに彼がこの城で寝泊まりする部屋へと来ていた。ドアを開けて寝台を見ると悠長に寝ていたので、優しく起こして差し上げたのだ。

「…無防備に寝ている俺の腹を強打した拳げ句、そのまま乗っかったままなのが優しい起こし方なのか……？」

「内臓破壊されて血を吐きたかつたですか？」

「こっ恐いから。そして、早く退いてくれっ！さすがに立ったまま乗られたらキツいんだよっっ！」

半泣きで怒鳴る久炉様。

まったく、だらしないです。こんなことで声を荒げるなんて。

これ以上騒がれても困るので、仕方がなく降りることにした。もちろん、しっかりと踏んであげながら。「ぐふおっ」なんて潰れた声は聞こえましたが、気のせいです、きっと。

「…な…なんで、朝からこんな仕打ちを…」

起き上がってお腹をさする久炉様を尻目に、堂々と僕は言い放つ。

「面白くないからです」

「やっぱ、昨日の話しのせいかな？」

間髪入れず返ってきた言葉は少し後悔が滲んでいたように感じた。義務として久炉はあの話を隠すこともなくしたわけだが、実際のこと彼自身もネックになるくらいには気にしていたのだろう。

そういう奴だっけくらい、わかっている。

だから、昨日の面白く無い話に対しては彼に怒っていない。あれは仕方がないとしか言いようがないことだ。

むしろ感情を制御しきれなかった自分の方に非はある。

「違いますよ。気にしてません。貴方は、王子として人間を束ねる者としてあの話をしなくてはいけなかった。それは、仕方がないことなんです」

「なら、なんで？」

「なんでこんなことをしたのかを訊きたいのだろう。不思議そうな久炉を見て僕は軽く鼻を鳴らした。」

「そんなの、理由は一つしかないに決まってる。」

「姫様が、貴方を部屋に呼んで一緒に食事を取りたいそうです。それが面白くないんですよ。なんで、わざわざ邪魔なヤツを呼ばなくてはいけないんですか」

「八つ当たりっ!？」

「だったらなんです。貴方さえいなければ……」

「ちよつと待った!目が恐いから。かなり恐いからあ!！」

「うるさいですね。こんな王子様で、よく国がまとまっているものです。」

「とりあえず、姫様がお待ちですので、さっさと準備してください。冷たい視線を投げかけておく。本当はいびり足りな……おっと間違いました。教育的指導をもう少しさせていただきましたのですが、今はこれくらいいいでしょう。姫様をいつまでも部屋に一人きりにできませんね。」

「…なんか、俺の扱い酷くない？」

「誰かの呟きが聞こえた気がしたのですが気のせいですよね。」

「なにか言いました？」

「につこりと笑いながら訊ねると、何故か久炉様はひきつった顔で「何も言ってますんっ!」と首を小刻みに振っていたのですがどうしたのでしょうか。それに敬語になってましたよ？」

「少しばかり気になりましたが突っ込まないことにします。」

「だから、早く着替えてくださいね?姫様が待っていますから。」

6 - 1 朝食の場（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。
予告通り登場人物の紹介をさせていただきます。

（登場人物）

成悠（ナユ）

「歳は十五歳。性別はもちろん女。
はじまりの世界の中心となる国のお姫様。実は二番目の姫で、姉と
弟が一人ずついる。」

神子であることにより、城の奥深くの目立たない場所に自分の部屋
と庭を持つ。銀髪と灰色の目が神子の証。

小柄な体躯と仕草のせいでも年相応に見えない。背が低く、
凹凸のないスレンダーな体なのは自覚しており、結構気にしている。
好きなもの：食べ物。庭の散歩。寝ること。

嫌いなもの：我慢すること」

こっ、こんな感じでどうでしょう？

もし気になることがありました場合は答えれる範囲で答えます。お
気づきの点などありましたら、教えていただけると助かります。
さて、次の人物紹介は悠詩です。

しよーもない後書きですが、付き合っていただけなら幸いです。

6 - 2 ・朝食の場

思ったよりも早く準備を終わらせた久炉様と共に、姫様の部屋に向かう。

「ただいま戻りました、姫様」

「あら、姫様を置いてどこに行っていたのでしょうかね」

ドアを開けた瞬間、嫌な声が聞こえ、嫌な姿が目に入った。「げっ……」と言わなかった僕を褒めて欲しい。

この部屋の主である姫様の横で艶やかに微笑む女性。黒色の長く美しい髪と綺麗な顔をもつ魔女こと、都夜がそこにいた。

「おかえり、悠詩」

そう言っ僕を見てくださる姫様。

今日も可愛いです。とても可愛いです。抱き締めたくなるくらい可愛いです。……けど、貴女の横にいる黒い魔女は排除させてください。

そんな思いをおくびにも出さず、にこやかに挨拶する。

「数日ぶりですね。なぜ、都夜様がここにいらっしやるのでしょうか？」

訳・何で僕がいない間に、お前が姫様と二人っきりで居やがるんだ。

「姫様が私を呼んだ気がしましたの。そして来てみれば、たまたま悠詩さんがいなくて」

訳・姫様が呼んでいたのを私が聞き逃すとも思っていますの？もちろん、アナタが居なくなっただのを見計らって来たに決まっていますわ。

二人ははにっこり笑って一連の会話をした。見た目的には普通の会話をしているようにも見えなくもない。実際、姫様はそういうところは鈍感なため、ありのままの状態だと思っている。

だが、久炉は僕達が犬猿の仲だということをよく知っているため、会話に隠された黒い言葉達も少なからず聞こえていたのだろう。

「…ホント、恐えな。笑顔って」

「どうしました？久炉様」

「なにか、言いましたか？久炉さん」

ポツリと呟いた声に、僕と都夜が反応する。恐いと言ってくださった笑顔を二人同時に久炉に向けた。もちろん聞こえてたし、確信犯だ。

徐々に青くなっていくその顔が見ていて楽しいですね。

「い…いやー…。アハハ」

引きつり気味の笑顔でその場をしのごととする久炉。そんなんで僕達が納得するはず無いじゃないですかー。あはは。

「久炉様？」

「久炉さん？」

顔を近付けて名前を呼ぶ。いつの間にか都夜も側まで来ており、僕同様に顔を久炉に近づけた。

都夜の顔を至近距離で見た久炉は顔を青以外の色で染め上げたが、また直ぐに色が戻りまた変わると……忙しそうだった。

そして最終的には

バタツ

ぶっ倒れてしまわれた。

「だっ大丈夫ですかっ！？久炉様っ？」

自身せいであるにも関わらず、急に態度を一変して倒れた彼に寄る都夜。その顔には珍しく慌て心配した色が見えていた。

あーあ、情けないお姿ですねー。

「大丈夫ですかー？早く起きてくださいねー、久炉様」
声をかけながら抱き起こして体を揺らす。横で「もっと丁寧に扱いなさいっ！！」とか言っている、倒れさせた張本人はうるさいので無視しておく。

どーでもよさそうな態度をとる僕と、過剰なほどに心配している都夜を見て、珍しく呆れた調子で姫様が言った。

「なんだか、久炉が可哀想」

いつもと違う彼女に、どうしましたっ？なんて訊けるヒマはなかった。

*

みんなでテーブルを囲んで食事をする。姫様から時計回りに都夜、久炉、僕の順番だ。

一応、僕は身分が下なので、後で一人で食べようかと思っていたら半ば無理やり座らされた。

「悠詩も一緒にごはん食べる」

服の袖を掴んで僕に言う姫様。：「なんだか有無を言わせない何かがあった。顔はいつも通り無表情だったのになんででしょう？」

久炉様はというと、あれから程なくして目を覚ました。起きて直ぐに都夜の顔が間近にあったため、またしても気を失いそうになっていました。何か大丈夫だったみたいです。ちなみに、そんな様子を見て都夜は「ふふっ」と笑っていました。確信犯ですよね？
たぶん。

目の前に座る都夜をしてみる。姿は綺麗だが、中身がどうも僕は好きじゃない。二人きりで居たら、絶対にいがみ合っていそうだ。

お互いチクチクと嫌みを言っているのが容易く想像できる。
不意に都夜と目が合った。顔一面に渋面を作って直ぐに視線を逸らす。

おかげで僕は頬を引きつらせないようにするのが大変だった。

「…本当、なんで久炉は都夜なんかを…」

そう思った瞬間、久炉が嘔き出した。何してるんですか。食事に汚いですよ。

蔑んだ目で彼を見てみると、顔を真っ赤にした久炉が僕に突つか

かる。
「お前なっ！いきなり何言ってただよっ！！！」

「…は？」

何言ってるんでしょう、この人。僕は何も……

「本当、なんで久炉は都夜なんかを…。って悠詩言った」

姫様が食事をしながら視線を寄越さずに言った。

あー。言っていましたか。口に出しちゃいましたか。

結構無意識に言葉にしていたらしい。これで、久炉が真っ赤にな

ってるのも納得だ。
「いいじゃないですか。ウソ言ってますし」

さらりと言うと、「な……」と口をパクパクしている。間抜けに見えますよ？

「それとも、違いました？本当は久炉様は都夜様のこと大嫌いだったとか……」

「違うっ！！！」

僕の言葉に、久炉は怒った顔をして叫んだ。

「俺は都夜のこと嫌いなんかじゃないっ！むしろ……」

「むしろ？」

僕が訊ねたことにより、自分を取り戻してしまったのだろう。「むしろ……」の続きがなかなか返ってこない。次の言葉を発するのを

待っていると、別の声が介入した。

「お止めなさい、悠詩」

我閉せずだった都夜が、すつと顔を上げる。その顔は動揺など欠片も見られず、ただ冷静だった。

「貴方は仮にも従者の位なのですよ？他国とはいえ、久炉さんは王族です。無礼にあたりますわ」

怒っているわけでもない。淡々と、僕に注意をする。

それに薄ら笑いしながらも、久炉に体を向けて深く頭を下げる。

「そうですね。すみませんでした、久炉様。僕の非をお詫びします」

「あ…いや、俺も悪かった。頭を上げてくれ、悠詩」

「わかりました」

久炉の許しがあつて、頭を上げたことにより彼の顔が自然と目に入る。

さっきまで真っ赤に染まっていたはずの顔は、今ではすっかり元の顔色に戻っていた。

けれど、苦笑したその目は少し寂しそうだった。

当たり前だろうな。

そう思う。

僕の言葉で過剰な反応を見せたのは久炉だけ。都夜はいたって普通。少なからず想いを寄せられていることを知っても彼女は表情一つ変えず、事務的に久炉を助けただけ。

それは、どんなに心える仕打ちだろうか。

想う久炉は、落ち込む様子はない。苦笑してそれで終わり。

想われてる都夜は、否定も肯定もしない。今みたいに淡々としていて、決して心えることはない。

それが、とてもどこかしく思えた。

この場に二人を呼んだ姫様は、あれつきり言葉を発しない。
代わりに、うっすらとした笑みを口元にのせていた。

6 - 2 ・朝食の場（後書き）

予告通り、今回は世話係さんの紹介です。どうぞです。

（登場人物）

悠詩（ユタ）

「年齢は十五歳。性別は男。

立場は成悠の世話係兼護衛。幼い頃から世話係として成悠の傍にいる。護衛としての腕前も相当のものだったり。

性格は少し？腹黒い。姫様最優先な思考を持つ、ちょっと危ない人。他人がどうなるうと関係なく、面白くない場合はどんな冷酷非情なことも成し遂げる。全ては成悠次第。

身長は平均並。久炉より少し小さい。そこまで背が低いわけでもないため、あまり気にしていない。むしろ小回りが利くので満足している。

好きなもの：成悠。単純な人。

嫌いなもの：都夜。自分と成悠の間を邪魔する者。」

どうだったでしょう？今回の人物紹介は。

次回は都夜ですかね。

次も見えていただけたら嬉しいです。

7-1 姫様と侍女。

「成悠様、ただいまですー」

久炉達の一件から、暫く日が経ったある日のこと。

庭に出て散歩をしていた姫様の前に、一人の少女が現れた。…否、空から降りてきた。

「おかえり、優里」

特に驚きもせず、相手を迎える姫様。…前にも言いましたが、少しは警戒して欲しいものです。

なんて考えて、一瞬でも気を逸らした自分が腹立たしい。

「えへへ。やっぱり、成悠様をぎゅーっとすると落ち着きます」

いつの間にか少女は姫様に抱きついていて。とても幸せそうな顔でぎゅーをする。

常の通り、特に嫌がりもしないで姫様は体を委ねる。その姿は顔立ちや色合いを気にしなければ、歳の近い仲良し姉妹にしか見えな

い。

「なんだか、前にも似たことがあった気がします。」

「姫様を離してくださいませんか、天使様？」

険のある目を幾分和らげ、ニッコリ笑って言う。引きつり気味の類はこの際、気にしてはいけません。誰であるかと僕の姫様に抱きつかれるのは嫌なんですよ。

たとえ、神から使われし“天使”だとしても。

「あゝ、悠詩くん。ただいまです。…もう、天使様なんて呼ばないでくださいって、いつも言ってるじゃないですかー」

「どこをどう見ても、今の貴女の姿は天使様じゃないですか」

にへらと笑った後にプクツと頬を膨らませる少女に、呆れ口調で返した。普段ならば気にせず名前で呼ぶが、今の彼女の姿を見ると

それは躊躇われる。

少女の背には翼が生えていた。純白の羽根で出来た、淡い光を纏う美しい翼。目の前で、僕の姫様に抱きつく少女は天使以外の何者でもない。

「天使：ですけど、優里は優里です。優しい里でスグリですよ？」
子供の駄々のように、自分の名前を繰り返す天使様。それに対して、ため息を漏らしながら言う。

「なら、その羽根を仕舞ってください。仕舞ったら、あなたを名前で呼びますよ」

「えっ？…羽根？」

不思議そうな顔で呟いてから、自分の背中を見る。どうやら気付いてなかったらしく、「あっ」とか小さい声を上げてからその翼を仕舞った。瞬き一つ分くらいの速さでそれは消える。いつ見ても、その仕組みはわからない。

「あはっ。ありがとうございます。危うく出っっぱなしになるところでしたあ。危なかったですね」

全然危なそうに聞こえない声音で優里が言う。脳天気なんだかなんなんだか……。

「もう少し気を付けてください、優里」

「心配してくれているのでしょうか？ありがとうございます」

注意をしたはずだというのに、優里は反省の色は見せず柔らかく微笑む。

僕には出来ないような、無邪気な笑み。ときめきよりも、安らぎを与えてくれるような不思議な笑みを彼女はつくる。何も知らない者が見ても、天使は慈悲深く、優しいものだとすぐに決めつけてしまいそうなものだ。

「今回は、どれくらい時間が経ってます？」

久しぶりに見た微笑みを観察していると、不意に優里が訊いてきた。その目から少し不安の色が感じられる。

「ひと月」

珍しく、彼女の腕の中に収まっている姫様が答えた。淡々とした声も気にせず、優里は「うん」と悩み始める。

「思ったより長かったですねえ。侍女長様からお叱りを受けるでしょうか？」

「大丈夫。わたしが口添えしておく」

苦い顔になった優里に、姫様が安心させるかのように言う。

「アツチとコツチでは、時間の流れ方が違う。わからなくなるのは当たり前。だから、気にすることない。適当に理由つけて、わたしの用事にしてあげばいい」

珍しく饒舌だと思っていたら、なに言っちゃってるんですか姫様っ！絶対、その理由とやらを考えて、侍女長に伝えるに行くのは僕の仕事にする気でしよう！

僕の心の中の抗議はむなしく、誰にも届かなかった。代わりに、ほっとした様子で優里が微笑む。

「よかったです。よろしくお願いしますね、悠詩くん」

…やっぱり僕の役目ですか、ソレ。

そう嫌な顔をしていると、姫様は僕を見て当たり前だと言うように頷く。今に限ってタイミングが良すぎですよ！。狙ってやってます？

問い詰めなくなる衝動を抑え、僕は再びため息を吐いてから、それまで閉じていた口を開く。

「わかりました。けれど、姫様と優里も一緒に考えてくださいよ？

…一介の侍女が一ヶ月も職場放棄した理由を」

二人は口には出さなかったが、その言葉を聞いた時の感情はかなり顔に出ていた。

面倒くさい、と。

ニツコリと久炉様曰わく恐い笑顔を見せてやって、そんな気持ち粉々に砕いてやる。

僕にだけ面倒事を押しつけようなんて、そんなこと許しませんよ？

そこから、優里と僕とときどき姫様で「侍女の職場放棄の理由」を考えるたのだった。

7-1・姫様と侍女（後書き）

見てくださった方、見てくださったっている方、ありがとうございます。
：毎回毎回、同じような言葉ですみません。

とりあえず、人物紹介です。

～登場人物～

都夜（ツヤ）

「年齢不詳。性別は女。艶やかな黒髪と紫黒色の瞳が特徴。
魔法という不可思議な力を持つ、世界に1人しかいない魔女。その
力のせいで大抵の人間から恐れられている。」

成悠を溺愛しており、悠詩と同様に少し？変な人。悠詩のことは軽く「消えればいいのに」とか思っている。久炉のことは……ネタバレになるので省略。基本、人間への接し方は平等。

身長は女性にしては高めで、悠詩と同じくらい。身体つきは一言で言えばグラマー。成悠と正反対で、細い所はきちんと細く、出てほしい所はきちんと出てる。むしろ、豊満すぎ。

好きなもの：成悠。可愛らしいもの。

嫌いなもの：悠詩」

一部ネタバレのため省略です。だったら、書くなよ！とか思われそうですが、書きたかったのです。深い意味はありません。

この頃、毎日更新することが出来ていません。なんだか、申し訳ありません。

出来るだけ早めに更新するので、これから読んでいただけましたら幸いです。

ちなみに、次の人物紹介は久炉です。

7-2・姫様と侍女

天使という言葉聞いて、まず何を思い浮かべるでしょう？
純白な羽根。慈悲深さ。優しい微笑み。神に仕える者……といったところですかね。

実際、僕達の世界にいる天使もそんな感じですよ。

世界が出来た時からいると言われていた天使は、可愛らしい少女の姿をしているという。生成色の細く柔らかい髪は、ゆったりとした波を描きながら腰元まで流れており、大きくぱつちりとした瞳は薄い緑色をしているらしい。

そんな、神に近いものとされ、崇拜されそうな天使様は

現在、人間に紛れて神子様侍女として働いています。

*

「いや、助かりましたあ。これでお咎めなく、お仕事に戻ることが出来ます」

へらつと笑う少女は、平凡な茶色の髪をしている。しかし、長めの前髪から時折覗く瞳の色が彼女が何者かを示すのに十分だった。「けど、よく考えつきましたね」。あんなに遠回しに真実に近いことを

さっきまで嬉しそうに笑っていた優里が不意に感心しているような顔をした。それに僕は苦笑して言う。

「嘘で固めると、いずれ綻びが生まれますからね。適当に似たことを言っておけばいいんです。最終的に姫様からのお許しがあったとさえ言えば、殆どの者は反論できませんし」

姫様付きの侍女がひと月も職場を放棄した理由を、多少無理があるだろうことは承知で伝えた。

彼女の親族の中で病で倒れたものがおり、看病出来るのが彼女しかいなかったため故郷へと帰っていた。主である姫様には許しをいただいていたが、急だったために侍女長に伝えるのが遅くなってしまった。

と、まあ、だいぶ無理がある言い訳を、優里と共に彼女の上官である侍女長に伝えてきた帰り道が今である。

ポーカーフェイスな侍女長は訝しそうな顔もせず「ああ、そう」と一言いって話を受け入れてくれた。納得してくれたかどうかは別として、表面上は承知したことにしてくれたのだ。話のわかる人である助かる。

「まあ、染めた髪の色を元に戻して、本当のことを伝えたらあの方はどんな表情をするのでしょうかね」

目立ち過ぎる生成色の髪は今は茶色に染めている。さすがに目の色まで変えられないが、長めの前髪と侍女装飾である薄いヴェールで顔を隠しているため、独特の瞳の色を見られることはほとんどない。

自分で言いながら想像して、つい笑ってしまった。あの顔が呆けるのか、ただ驚くのか、怯えるのか。優里が素性を露わにするときに是非とも同席したい。あり得ないですけどね。

「笑いごとじゃないですよ。バレたら一貫の終わりです」
表情を曇らせ、頬を膨らませる優里。その姿は人が思い描くような天使の姿には見えない。

「すみません。…と、その顔やめてくださいね。姫様のお部屋に着いてしまいましたから」

姫様が万が一真似したら困ってしまいます。可愛すぎて卒倒しそうです。

そんな想像をしているなどということは微塵も見せずに、一つの扉の前で立ち止まってから優里に注意する。彼女は少しふてくされた顔をしてから、表情を引っ込めた。

そして

「成悠様っ。ただいま戻りましたあ！」

勢い良くドアを開け、イスに座っている姫様に向かって走り出す。気付いた時には遅かった。すでに優里は姫様を抱き締め、頬擦りしている。

「…優里、少し苦しい」

珍しく抗議する姫様に、彼女は慌てて腕の力を緩めた。

「すっすみませんっ！大丈夫ですかっ？」

そうやって訊ねる間も姫様を離そうとはしない。

「いや、一旦離しましょうよ。その思いは口から漏れてしまう。

「離れましょうね、優里？」

だんだんイライラしてきたので、ニッコリ笑って言ってやった。

さっさと僕の姫様から離れる……なんて口が悪いことは思ってたまんよ？たぶん。

僕の笑顔を見て、一瞬ビクツと体を跳ね上げさせたか優里は、渋々姫様から離れた。素直なのはいいことです。

一方、やっと解放された姫様は僕を見ていつもの一言を言うてくたさった。

「おかえり、悠詩」

その言葉が嬉しくて、自然と頬を綻ばせる。

「ただいま帰りました、姫様」

彼女のたった一言が僕に幸せというものを運んでくれる。僕に対して言うてくれるその言葉が何より大切で……、その機会を奪う者

はいくら優里でも許しません。

お預け状態をくらっている優里は潤んだ瞳で姫様を見た。

「ぎゅってしちゃ、ダメですか？」

その様子は、主人の顔を伺うようなどこかの動物を連想させるのは気のせいでしょうか。

そんな僕の思いなど露ほども知らない姫様は、そんな優里を真っ直ぐ見て言った。

「いい。けど、強いと苦しい」

「ありがとうございますっ」

許しをもらった優里は、今度は包み込むように優しく姫様を抱きしめる。

その行為にイラつきながらも、いつもと違って何度も姫様を抱き締めたがる優里に疑問を覚える。どうしたのだろうか？

そう思ったのは姫様も同じだったらしく、不思議そうな声で訊ねる。

「なにか、あったの？」

それに優里は、ふるふると首を左右に振って答えた。

「違いますよー。…ただ、成悠様が恋しくなっただけです」

嘘とも本当ともとれないその言葉は、僕の不安を煽ることしかしなかった。

7-2・姫様と侍女。（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。
では、恒例？の人物紹介をどうぞです！

〈登場人物〉

久炉（クロ）

「年齢は十八歳。性別は男。焦げ茶色の髪に赤墨色の瞳を持つ。
悠詩達が住む国の隣国の王子。文武両道。決断力、行動力もあり、
物事を冷静に判断する頭も持っているらしい。まだ王位に着いてい
ないが、国民からの人望も厚い。」

成悠の婚約者となっているが、形ばかりの名ばかり。お互いその気
は無い。悠詩は悪友であり、大切な友人と思っている。都夜のこと
は成悠や悠詩と違った意味で好き。だけど、相手にされない可哀相
なヤツ。

身長は平均より上。いわゆる長身。程よく筋肉が付いていて、見た
目的にも悪くない。顔も良いため、女性に人気がある。

好きなもの：体を動かすこと。

苦手なもの：悠詩の笑顔」

うう……。人物紹介がだんだんショボくなっているような気がしなく
もないです。

けど、設定って大切ですね。ときどきズレたりしそうですけど……。
そうならないように気をつけようとは思っています。

さてさて、次回の人物紹介は優里です。

次も、お付き合いいただけたら嬉しいです。

8 ・世話係と侍女。（前書き）

今回、成悠（姫様）は登場しません。
念のためご報告です。

では、本編をどうぞです。

8・世話係と侍女。

姫様の侍女が帰ってきた。

神とやらに“報告”しにいった天使は、ひと月経って帰ってきてしまった。

「もう。なんで、そんな目で私を見るんですかあ」

頬をプクツと膨らませて僕を見る優里。睨んでるつもりなんですよけど、全くそう見えません。

「…そんな目とはどんな目でしょう?」

「私が帰ってくるのが遅かったからって、拗ねないでくださいよ」
「拗ねてませんっ!」

どうやって見たらそんな風に思うのですか?!? 叫びたくなるのを抑えて、否定だけしておく。

そんな僕とは正反対に優里はクスクスと笑って言った。

「相変わらずですねえ。まあ、実際のところは私が帰ってきて、成悠様と二人きりになれなくなるのが面白くないんでしょうけど」
その通りですとも。

わかっているなら、変なことを言わないでください。それと、拗ねているわけではありません。

心の中で愚痴つてると、優里が人差し指を立てて僕の胸を押した。女性が男性にむやみに触れるものではありませんよ、と言おうとしてとき、先に彼女の方が口を開いた。

「ちゃんと口に出して言うてくださいねー。どうせ、思っている」とは駄々漏れなんですから」

子供みたいな無邪気な笑みでそう言う。声音も優しい。なのに、

その言葉と全く似つかわしくないのはわかっていてやっているのだろうか。

たぶん、わかってないな。

けど、そう言ってくれるなら好都合です。さっさと用件を済ませて姫様の元に戻りたいですから。

「では、言わせていただきます」

「どうぞー」

緊張感のない間延びした言い方も聞き慣れた。初めてあった時はかなり苛ついたっけ、なんて思い出しながら言う。

「僕になんの用ですか？」

この問いは当たり前だ。

別に僕が彼女に用事があったわけではない。彼女に呼ばれて、わざわざ姫様が眠りについたのを見計らい、部屋を抜けてきたのだ。

「悠詩くんは知っていますか？」

唐突に優里が訊いてくる。もちろん「なにを？」としか言いようがない。実際、そう答えた。

すると、急に真剣な顔つきになって彼女は言った。

「巫女狩りのことです」

ついこの間、聞いたばかりの言葉。僕にとって不快でしかなかった話しのことだろう。

「その顔を見る限り、もう知っているようですね」

ため息をついた優里に、声は出さずに頷く。知っている。知りたくなかったけれど、知ってしまった。

神子が……成悠が狙われていることを。

「情報源は久炉様でしょうねえ。あの方がアナタに言わないはずがない。…そして、どこまで知っています？」

「この頃、また巫女狩りがされて行方不明者や死者が数名出ていること。あと、目的が前回と違うらしいということですよ」

「その目的は……」

「知っています」

優里の声を遮って答えた。目的とやらを口に出したくはない。違う感情まで吐き出しそうで、嫌だった。

それがわかったのだらう。優里はそれ以上訊くことはしなかった。代わりに、沈黙が流れる。

しばらく続いたそれを僕が破った。

「貴女は、いつから知っておられたのですか…？」

彼女がこの世界を離れたのはひと月前。僕が久炉から話を聞いたのは彼女が“ここ”にいないときだ。

すると、ふふつと優里は笑った。

「私をなめていただいたら困りますねえ。仮にもこの世界の監視者ですよ」

そう。彼女は天使であり監視者だ。天使の役目が、神様自ら創った世界を監視すること。そして数ヶ月に一回くらいの割合で“報告”をしにいく。

なら、と疑問が浮かんだ。

「何故、僕に教えてくれなかったのですか」

今知っているということは、僕が知るよりもずっと前に彼女はこのことを知っていたはずだ。

「私の口から人間に何かを教えることはタブーです。それに、悠詩くんに言っただけで怖い目に遭うのは嫌ですからねえ」

最初は教本でも読むように言っていたはずなのに、最後の方は本当に嫌そうに顔をしかめた。

心外です。まったく、みんなして僕をなんだと思っているんですかね。

「…言い分はわかりました」

反論したいことはたくさんありますが、やめておきます。軽くム

かつきまですが面倒なので。

それより

「貴女は何を考えているのですか？」

教えてはいけないのなら、何故僕にその話について訊いたのか。万が一、知らなかったらどうする気だったのだろう。

僕が口に出さなかった分も、優里は“聞いていた”はずだ。彼女にも、姫様と同じく聞く能力を持っているから。

「そうですねえ…。そのことがあり、成悠様を少し外に連れ出したいなあ…。なんて」

…!?

突拍子もないことを彼女は言ってくれましたよ？ 一瞬思考が飛ぶくらい驚きました。しかし驚きの次に抱くのは、当たり前ですが賛成とは全く反対の気持ちです。

「駄目です」

絶対嫌です。あの可愛らしく、愛らしい僕の姫様を人目がある場所に連れて行くなんて、絶対に絶対に嫌です。

駄目と即答で断言した僕に、優里がむくれて突っかかる。

「なんでですかあ！…そもそも口では“駄目”なのに、心では“嫌”になつてますよっ？」

「だからなんですか。僕は断じて反対です」

嫌ですよ。当たり前じゃないですか。もし、姫様を集めるような輩がいたら殺したくなりますもん。想像しただけで危ないのに、実際そうなつたらどう責任取ってくれるんですかっ！

「…自分を抑えるとか、相手を殺さないという気持ちが無いのですか？」

「僕がそんなこと出来るとお思いですか？」

「……」

呆れ口調の優里に間髪入れずに訊いてやったら、黙り込まれてし

まった。その沈黙がなによりも「出来ないだろう」ということを語ってくれている。

……自分で言っておきながら、少しばかり悲しいです。

「けっけど、これは決定事項です。そろそろ成悠様に城外のことを知っていただかなければいけませんし」

あ。やっぱり僕の言葉は否定してくれないんですね。

「それに、次の巫女を探しに行かなくては。そこで成悠様が必要になるのです。代わりの巫女を見つけられるのは、神子様だけです」

僕が聞きたくないことを、優里は口に出した。大嫌いな言葉を声にして言った。そして、拒否権が無いことも。

だから吹っ切れることにした。

「…わかりました」

わかりたくないけど、そう言うしかない。どうせ、僕の一存で決めれるものでもない。

「優里と都夜も一緒なのでしょう？」

「はい」

「いつ頃からですか？」

「出来るだけ早い方が……」

「では、準備が出来次第ですね」

「よろしくお願いします」

その後も事務的な話をし、終わってからはそれぞれの寝室に戻ることもあった。

当人であるはずの姫様に伝えるのは明日だろう。

気分が滅入ったまま姫様の元へ戻るのは気が引けたため、適当な部屋に入って頭の中を整理していた。

正しくは、頭というより心だ。

高ぶる感情を抑え込まなくては、無意識になにかしでかしてもお

かしくない。前にいろいろやらかしたので、その辺は経験済みだ。

だから、そうならないようにしなくては。

姫様に心配させたくないから。傷付けたくないから。

そのために、この高ぶりを押さえたい。なのに、優里の声が言葉が反芻する。

聞きたくないのに、思い出したくないのに。

神子様。

その言葉が嫌い。

なんで、あの人は神子なんだ？

普通の姫として、穏やかに過ごして欲しかった。

なのに神子として生まれたせいで、自分のために思うように動けない。動き方すら知らない、真つ白な少女。

神子という名が自由を奪い、彼女自身を縛る枷。

僕は“成悠”さえ幸せになっけてくれればいい。

だから

神子なんて消えればいいのに。

8・世話係と侍女。（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます！感謝です！

前話から2日くらい空いてしまいました……。

出来るだけ日を空けないようにするので、これからも見ていただけたら嬉しい限りです。

では、人物紹介に移りたいと思います。

〔登場人物〕

優里（スグリ）

「年齢不詳。性別は一応、女。生成色の髪に薄い白緑の瞳が特徴。神の使いであるはずの天使だが、訳あって侍女として成悠のそばにいる。城内では髪は茶色に染めているため、天使だとはバレていない。性格は天使の名で思い浮かぶように、平等に優しく慈悲深い。その上、無邪気な面もある。

成悠とは主従関係にあるが、姉妹みたいな接し方をする。悠詩は仕事仲間であり友人。都夜は昔からの付き合いがあり、心を許せる友みたいな存在。久炉は他国の王子としか認識がない。

身長も体の凹凸も並だが、バランスは取れてる。見た目は童顔？で、十六か十七歳位にしか見えない……その実は、結構な年齢だったり。好きなもの：空。成悠。自然。生き物。

嫌いなもの：秘密」

今回もわけわかんないのが一つありましたね。

嫌いなもの、秘密。

バカか？なんて思われそうですが、気にしないでください。きっといつか本編に出ますから。∴保証はありません。

そして、今のところ登場した人の分の紹介は終わりました。

まだまだ沢山の人物が出てくる予定なので、その度に後書きに載せさせていただきます。

それまで 登場人物紹介 はお休みになります。

また載せていただくときは、よろしく願います。

9・初めてのお出かけ

「そと？」

聞き慣れない言葉を姫様は不思議そうに呟いた。急に話を持ちかけられて、何のことだろうかと首を傾げている。

そんな彼女の反応を何となく予想していたのだろう。優里は気にせず、にこやかに答えた。

「はい。行ってみませんか？お城の外へ」

気軽に、散歩にでもいきませんか？という感じの口調。確かに普通の感覚だと、外へ出掛けるくらいどうってことないだろう。

しかし、姫様は立派すぎるほどの箱入り娘。産まれて十五年間、一度も城の外に出たことがない。城内でも自室や庭など限られた場所しか歩いたことのないようなお方だ。

それなのに、急に外へ出てみないかと言われたところで意味が飲み込めないのも無理はない。理解しても、困惑したり悩んだりすることだろう。

だから、直ぐに返事なんか返ってきたりしない。

そう高を括ってたのに

「いきたい」

すぐに答えられてしまった。

「本当ですか！？」

姫様の言葉にはしゃぐ優里。心なしか、姫様の顔も嬉しそうに微笑んでいるように見える。

なのに、僕は一緒に喜べなかった。

外出の理由。それがネックで、どうしても喜べないし嬉しがることも出来ない。

知らない姫様は珍しく頬が緩んでいる。とても嬉しそうなのは目

に見えてわかった。姫様が笑うことは……普段、表情を変えない彼女が笑うのは僕にとっても嬉しい。

嬉しいことなのに、なんだか少し痛かった。

「どうしたの？悠詩」

思考にはまっついていて、それまで気付かなかった。

いつの間にか近くまで来ていた姫様が、僕の顔を覗き込んで言葉をかけてくださった。その顔はさつきと違って不安そうで、……そうさせたのが自分だと思つとやるせない。

けど、そんなことを表情に出すほど僕も馬鹿じゃありません。余計に心配させたくないですからね。

だから

「なんでもないですよ」

いつも通り笑っておく。彼女を安心させられるように優しく笑う。

「……」

それでも不思議そうに見る姫様。仕方ないですよね…。

だから、気分を変えるように僕は話しかけた。

「城の外に出るのは楽しみですか？」

僕の質問に、迷いなくコクンと頷く姫様。その姿がとても可愛い。

「…不安だったり、怖かったりはしませんか？」

少し躊躇ったが、一番気掛かりだったことを訊ねてみる。初めて、外に出るのだ。何も知らない場所に行くのは少し心細く感じる時もある。

すると、姫様は少し悩んでから答えた。

「こわい」

「ならっ…！」

やめましょう。行かないことにしましょう。

そう言おうとしたのに、続けられなかった。

「けど」

僕の言うより早く、姫様が口を開く。

なにを言うのか見当もつかなかった。それだけに、その言葉はかなりの破壊力だった。

「悠詩も、一緒でしょ？」

「…え？」

一瞬何を言われたのかわからなくて、放心してしまった。そんな僕に、姫様はかまわず続ける。

「悠詩も一緒なら、こわくない。それより、いろんなモノを見てみたい。知らないモノを知りたい。そしたら、こわいものも無くなると思う」

そう言って、目を細める姫様。その微笑みは子供のようで、見ている者を引きつける力が合った。

しばらく見とれていたが、さっきの言葉を思い出し、その意味を理解してハッとす。

悠詩も、一緒でしょ？

当たり前のようにそう言っただけのける姫様がとても愛しかった。一緒にいれば、こわくないと言ってくれて嬉しかった。おもいきり、抱きしめたくなくなるくらいに。

だから、今度は心から笑って僕が言う。

「もちろんです。僕はずっと姫様のお傍にいますよ」
貴女の役に立てるように。

ああ、僕は馬鹿ですね。

いらぬ心配などせず、変な気持ちに囚われずに、彼女を護ることだけを気にしていればよかったのに。

無闇に利用されるようだったら、僕が阻止すればいいんです。ど

んなことをしてでも。

それまでは外のいろんなことに触れて、感じて、考えて……今まで出来なかったことを存分にさせてもらいましょう。姫様に、今よりももっと表情を覚えていただくのに丁度いい機会ですしね。

そんなことを思いながら、目の前で僕を見る愛しい人に微笑んだ。

「あのー。私いるんですが？」

いつの間にやら蚊帳の外になってしまっていた優里が、空気を読まずに声をかけてきたので、冷たい目を向けさせていただきました。当たり前ですよ？

少し怯んだ顔をしてから、優里は気を取り直して言う。

「でっでは！決まりですね？明日から出発なので、そのおつもりでお願いしますですっ！」

早口で言った後、速攻で部屋を出て行きました。

…はて？僕なにかしましたかね。

*

そんなことがあったのが、昨日のこと。

今の僕達は出掛ける準備をして姫様のお部屋に集まっていた。

「では、移動致しますので心の準備を。動かないでくださいね」
都夜がそう言ってそれぞれの顔を見る。

当初の予定の通り、姫様の同行者は僕と優里と都夜だった。都夜が移動魔法を使って目的地に行く。

「行きますよ」

都夜がそう言ったのと同じ時、淡い光が僕達を包み込んだ。

その中、誰かの手が僕の手に触れる。子供のような小さい手で、誰なのかは直ぐにわかった。

だから、大丈夫ですよ。

と気持ちを込めてその手を握る。

さあ、最初の目的地はどこでしょう？

10-1 火の巫女と少女。

火を司る巫女は髪も瞳も赤に近い色合いを持つという。そして、その色を表すように、気が強く、情熱的で、熱血的な人が多いと聞く。

あまりにも僕が苦手な要素たっぷりなので……会ったことはないけれど……正直、会ってみたいとも思わなかった。だというのに

「一番目は火の巫女様のところですよー！」

なぜ、初っ端からそこなんですかつ！？

最悪だ……。その思いから、かなりのしかめっ面になってしまっていたようだ。

「悠詩くん、どーしたんですか？顔が悪いですよ？」

さっき元気よく目的地を告げた優里は心配そうに僕の顔を覗く。

なんですか？顔が悪いって……。顔色が悪いならわかりますよ？顔って人相ですか。元からですよ、この顔。少々いじけたくなります。

「ほっときなさい、優里さん。コレ顔が悪いのはいつものことです」

都夜の素っ気ない物言いに一瞬間流しそうになったが、よくよく考えると余計に酷くないですか？自覚してても気になりますよ。しかも、コレって……。なんでしょうか、このイラつきは……。しかも優里、顔かないてください。

必死に怒りを抑えていると、いつの間にか姫様まで僕の方を見ていた。興味本位なのか、観察物を見ているような目で僕をじっと見つめている。

そして、ポツリとこぼされた。

「かわいい顔だと思う」

悪びれているわけでもなく、真面目な顔で言ってくさった。その言葉がどんな破壊力を持つのかも知らずに。

「あーあ。成悠様？それは男の人にとつて褒め言葉ではないんですよ。…悠詩くん。シヨックなのはわかりますが、固まってないで、優里の苦笑しながらの声で我に返る。」

一瞬意識が飛んでしまっていたようだ。しかし、意識が戻ると直ぐに不快な声が聞こえた。

「…ふつ。可愛い、ですか。確かに、しかめていなければ、少女のような顔にも見えなくはないですものね」

今にも笑い出しそうな震えた声で都夜が言う。口元は手で隠しているが、その下にある口が絶対に歪んでいると断言できる。

「さつきは“悪い顔”で、今度は“少女”ですか。ケンカ売ってます？」

頬を引き吊らせながら都夜を見るとフンツと鼻を鳴らされた。

「事実を言っただけですわ」

そんな当たり前みたいに言わないでくださいよ。怒りを抑える僕の身にもなってください。

… 姫様がいなくなったら殺すのに。

少しばかり物騒なことを考えていると、聞き慣れない声が聞こえた。

「あ、あの。何をなさっているのですか？」

見ると一人の少女がオドオドとした様子で立っている。

考えてみれば、人の家の前で堂々と話していたのだ。不信人物と勘違いされても仕方がない。

「すみません。騒がしかったですよね。今から訪ねようと思ってい

たところだったんです」

「ウチをです、か？」

優里の言葉を聞いて、不思議そうに言う少女。警戒心なんてものは微塵も感じなかった。

そんな彼女に、優里の後ろに立つ都夜はいつもの艶やかな笑みを向ける。

「ええ。私たちは天火の巫女様に会いに来ましたの。貴女、ですわよね？」

少女は一瞬熱に浮かされたようにぼーとしたが、すぐに自分を取り戻すと頓狂な声を出した。

「わつわたしが巫女ってなんでわかったんですかっ!？」

顔と声と態度を見る限り、本当に驚いているようだった。むしろ、なぜバレないなんて思ったのだろうか。僕はため息を吐きたい衝動に駆られたが、止めといた。なんか、いろいろ気の毒過ぎて。

「見れば巫女だとすぐにわかるでしょう。その髪を見て気付かないなら、その人の目は節穴ですよ」

「…え？髪？」

僕が言うと、自分の髪を一房とってまじまじと見ていた。少女を見て真っ先に目に付く、ワインレッドのような赤い髪を。

しばらくそうやって、やっと合点がいった顔に変わる。

「ああ、そうか。そうですよね。巫女は珍しい髪色をしているんですもんね。…普段、あんまりみないから気付かなかった」

うんうん、と何度も首を振ってから、僕達の方を見てハツとした顔になった。…もしかして、僕達の存在を忘れていたんですか。

「スツスミマセン。わたしに何のご用でした？」

ごく自然な質問を少女はする。答えたのはまた優里だった。

「実は、少しの間ここに泊めていただきたく来たんです。ご都合つきますか？」

少女を見ると、目が点になっていた。とても驚いていることがわかる。

「…いや、泊めるのは良いのですが、ここが何処かわかっているの
お言葉ですか？」

口を開いたかと思えば、かなり困惑した様子で僕達の対応をした。
彼女がそんな顔をする理由はよくわかる。普通、ありえないのだ。
巫女が住む屋敷に泊めてもらおうなんて。

巫女は神に近く、人々からは崇拜されるような存在である。そんな
神にも似た人の家に泊めていただけこうなど、大抵の人だと恐縮す
る。罰当たりなどと思って、巫女の住む屋敷に居座ろうなど思わな
い。思うとすれば、無知な者か、無鉄砲な馬鹿くらいだ。

だから少女の対応の仕方は普通のものだ。むしろ、良い方と言え
る。少し誤解を招くような言い方ではあったが、悪意は全く感じら
れなかった。つまり、泊まること自体は別に構わないのだろう。

それがわかつているのか、優里は表情を崩さずに答えた。

「はい、知っていますよ。お泊まりになりたいと言われて困惑して
いる理由も察しがつきます。…実は、込み入ったお話がありまして
外では避けたいんです。中に入れていただければ嬉しいのですが…
…」

苦笑した優里の顔を見て、少女は慌てた様子で言う。

「そっそっですよ。立ち話も何ですし、中へどうぞ。大したおも
てなしは出来ませんけど」

そう微笑む姿は、僕が想像していた火の巫女とかけ離れていた。

おっとりした、優しそうな人に見えない。しかも、全く警戒心
が無いことも驚きだ。

うちの姫様といい、この方といい、“みこ”の名を持つ人は人を
疑う事はしないのでしょうか？それとも、どこか抜けているとか……

隣で共に歩く愛しい少女と、火の巫女であるはずの少女を見比べ、
そんな失礼なことを考えながら、促されるがままに最初の巫女の屋
敷へと入ったのだった。

10-2 火の巫女と少女。

客間のような所に案内され、敷かれた座布団に腰を下ろした。目の前では巫女らしい少女が慣れた手つきで人数分のお茶を淹れていく。その様子に若干違和感を感じたが、何も言わないでおいた。

「それにしても、お客様なんて久しぶりです。ゆっくりしていただくさいね?」

少女は柔和な笑みを浮かべながら、僕たちの前に湯呑みを置いていく。

どうやらこの家は和風な造りをしているらしく、イスがない。床正しく言えば畳の上…に座ったことのない姫様は少し落ち着かないようだった。さつきから何度も足を動かしている。

姫様には悪いけど、そんな所もちよつと可愛い。

「そういえば、自己紹介がまだでしたよね」

全てのお茶を淹れ終わり、自分の場所に座った少女はお茶を一口飲んだ後、そんなことを言った。

「わたしは皆さんのご察しの通り、天の火に属す巫女です。名は…」

そこで言葉は途切れ、少女は急に黙り込んだ。と思ったら、赤面しながら呟きのような小さな声で言う。

「…ヒメ、と申しま…す」

「ヒメさん、ですか」

「ヒメさんねえ。それまた大胆なお名前ですわね」

恥ずかしさからか俯く少女に構わず、優里と都夜はその名前を連呼する。2人の顔を見るに、わざとやっているのがわかる。だって、楽しそうに笑っていますもん。

悪趣味だなあなんて思いながらその様子を静観する。…止めないのかって?そんな無粋なことはいけませんよ、面倒ですし。

「…ヒメっていつても、お姫様の“姫”じゃないです。緋色の緋に

「明るいと書きます…」

涙目になりながらの少女の説明に、ニヤニヤした笑いを浮かべていた2人は「なるほど」と納得した顔をした。

「それで“緋明”ですか！。音だけきいていると誤解されそうなお名前ですねえ」

言いながら、うんうんと頷く優里。絶対わざとだと思う。

「どっとうか、緋と呼んでください…。恥ずかしくて死にそうです…」

相変わらず真つ赤な顔で俯く少女。その様子に都夜はいつものようにふふつと妖艶に笑った。

「ヒイ、ですね？緋明の緋をとった名ですわね」

「…はい」

一応受け答えはするものの俯いたままの緋明さんに、「顔をあげてくださいませ。可愛らしいお顔が見えませんよ」

都夜は普通ならば恥ずかしくて口に出れないような台詞を平然と言った。赤みを増した顔を少女はおそろおそろ上げる。…なんだか危ない雰囲気に見えるですが。

この場でそう思ったのは僕だけだったらしく、優里は気にした素振りを見せなかった。ちなみに、姫様は未だ座り方に悪戦苦闘していました。

優里は少女が顔を上げたのを確認してから口を開く。

「では、こちらも自己紹介をしなければですねえ。…けれどその前にお訊きしたいことがあるのですが、よろしいですか？」

「はい？」

不思議そうな顔をしながらも頷く緋明さんに、珍しく真面目な顔をして質問する。

「この国の二の姫様のことは何かご存知ですか？」

「えっ？」

脈絡がないように思える質問に、少女は目をパチクリさせてから答える。

「二の姫様がいらつしやいということとは知っていますけど……二の姫様は幼い頃から病を患っておいでで、公の場に出たことはありません。ですから、二の姫様がどういった方なのかまでは知りませんよ?」

「その姫様が実は“神子”だということも……?」

優里が相手を試しすように言うと、少しの間沈黙が落ちた。

「……どこからの情報ですか。それは」

聞こえた声は、少女のものとはわからないほど冷たい。彼女が纏う雰囲気も、先の穏やかさなど感じられないくらい、張り詰めたようなものになっていた。

その変わりように少し驚いたが、優里は全く動じない。むしろ、楽しそうに笑ってみせた。

「知っていらつしやるのですね」

「なんのことでしょう」

「しらばくれるおつもりですか? まあ、いいでしょう。……合格です」

「はい……?」

満足げに言った優里に、いつそう訝しげな顔をする緋明さん。当たり前前だ。急に「合格」なんて言葉を言ったのだから。しかし、その顔はすぐに驚愕へと変わった。

「…天使、様」

少女から、無意識にといった感じの言葉が漏れる。目は優里を見たまま見開かれていた。

「騙してすみません。けど、あれでは敵に二の姫様が“神子”だとバレてしまいますよー。もう少し、隠し事を上手くできるようにしましょうね」

にっこりと笑う優里の髪は生成色。ついさっきまで平凡な茶色だったその髪は、いつの間にか本来の髪色に戻っていた。

「改めて、紹介いたしましょうか。私の名は優里と申します。見ての通り、天使ですよー」

わざわざ言わなくても、その髪が嫌味なくらいに彼女の存在を示してくれている。

茫然としていた緋明さんは我に返ると、優里をしつかりと見据えた。

「なぜ、あなた様がここへ…?」

「それは追いつ追いつ話すとして、先にこちらの自己紹介してもいいですかね?それからの方が良いと思いますし」

理由を訊ねられたがサラリと優里がかわす。緋明さんは困惑顔で頷いた。というか、巫女より神に近いとされる“天使”に言われて反論なんか出来るはずもない。

それを知ってか知らずか、優里はマイペースに話し続ける。

「まずはこの黒髪の女性は都夜さんですよ。見てわかると思います
が、魔女さんですよ」

「よろしく願いますわ、緋さん」

紹介されて、都夜は微笑みながら挨拶をする。言うのは些か癪だが、その笑みは色っぽい。大抵の人は男女問わず落ちそうなくらい心惹かれそうなものだった。もちろん、僕以外はですが。

しかし例外は他にもいるようで

「へっ?まっ魔女さん!?世界に一人しかいないってあのっ!?!?」

笑みに惹かれるどころか、緋明は都夜が魔女であるという事実に驚いていた。この場合は例外というか、仕方がないと思います。滅多にどころか一生に一度会えれば良い方の“魔女”という存在が目の前にいるのだから。

それでも、これまでの彼女のテンションを見ていて少し不安になる。都夜に対しての反応は驚きと少しの怯えが交じっていた。優里に対してもほぼ同じ様な感情を抱いていたはずだ。姫様の正体を知ったらどうなるんでしょう?倒れなきゃいいですけど。

僕が珍しくそんな心配をしているというのに、優里はというと気

にせずに紹介を続ける。緋明さんの言葉にすら返す気が無いらしい。

「それじゃ次は、成悠様ですね。成悠様は“神子様”です」

「…みこさま？」

姫様を見て、緋明さんの動きが止まった。

姫様の髪は外出ということがあって、色を変えている。彼女の色も、彼女がどのような存在なのかを的確に表すものだったからだ。

止まったまま動かない緋明さんを見て、その髪色のせいで信じていないと思ったのだろう。優里は姫様の髪色を戻しながら言う。

「そうですよー。神の子の“神子様”です。ほら…」

勘違いした優里のおかげで姫様の美しい銀色の髪が露わになる。

それを見ても、しばらく緋明さんから返事は返ってこなかった。

それどころか

「緋さんっ!？」

そのままぶっ倒れた。

優里が駆け寄るが、すぐには目を覚まさない。

どうしたんでしょうか？なんて言う優里。自分のせいだという自覚は全くもって無さそうです。天然なんですか？それともバカなんですか？殴りたい衝動に駆られるけど、姫様がいる前でそんなはしたないことはできない。

都夜は都夜で予想していたのだろう、笑ってる。…わかってたんなら、止めるよっ。僕も止めなかつたため人のことは言えませんが。こいつと同類つてのは気にくわないですけどね。一応、倒れるきっかけとなった姫様は、その様子を不思議そうに見ていた。…観察していた、の方が正しいでしょうか？人が倒れているのが珍しくて気になるんでしょうが、やめてください。当事者の意識も無さそうです。

こんなメンバーで大丈夫なんでしょうか。先が思いやられます…

⋮
○

10-3 火の神子と少女。(前書き)

今回は、悠詩以外の視点も話の最初と途中に含まれます。
切り替えがわかりにくいかもしれませんが、ご了承ください。

10 - 3 ・火の神子と少女。

「緋明」

誰かが呼んだ。

その名前はわたしのであって、わたしのじゃない。

ねえ、わたしその名前じゃないの。

わたし達の名前であって、わたしの名前じゃ、ない。

だから、呼ばないで…

「緋さんっ!」

「……」

ふっと意識が浮上する。目の前には、生成色の綺麗な髪を持つ天使様がいた。どこか心配そうな顔でわたしを見ている。

「…わたし、死んだんですか…?」

そう無意識に訊いてしまっていた。

だって、目の前に天使様がいるんだもの。人離れたその美貌を見られるなんて、きつとここは天国なんだ……。

ぼんやりとした頭でそんなことを思っていると、ブツという何か吹き出したような音が聞こえた。

なんだろう?

「あはははははっ!なにバカなことやってんのよ。生きてるわよ。このおバカ」

豪快な笑い声。

襖の方に顔を向けると、そこにはわたしがよく知る人がいた。高

い位置で括った髪が歩くのにつれて揺れる。吊り気味の瞳は少しだけ気が強そうな印象を受ける、私と正反対なその人。

「…メイ、ちゃん？」

わたしの大切な人の名前を呼ぶと、相手は一瞬しまったというように顔をしたけどすぐに苦笑に変わる。

「ごめん、心配で出て来ちゃった」

美人はどんな顔でも様になるなあ。なんて、覚めない頭で思った。

*

豪快に笑っていた少女はメイというらしい。

「すみませんっ！紹介が遅れました。この方はわたしの姉のメイです。此度のご無礼、お許しください。お願いしますっ」

膝を折って正座をし、手を畳につけ、深々と額を畳に擦りそうなくらい頭を下げる緋明さん。いわゆる土下座というものをしていた。初めて見ましたが、ちょっと引きますね…。

「気になさらないでください。顔を上げてください、緋さん」

やっぱりという優里の声でおずおすと顔を上げる。それでも相手を窺うように上目使いで見っていた。不安で不安で仕方がないって顔だ。

「…緋、いい加減にしなさいな。仮にも火の巫女の“緋明”なのよ？せめて、前を向きなさい」

はあ、というため息と共にメイさんが言う。口調とは裏腹に心配そうな顔をして緋明さんを見ている姿は“お姉さん”って感じ。しかし、それを見ていない緋明さんは、顔を上げるどころか目まで伏せてしまった。

…火の巫女のイメージとはかけ離れた姿ですね。むしろ、メイさんの方が話に聞いていた巫女のイメージそのままです。

暫く経つてもそのまま顔を上げない緋明さんに諦めたのか、メイさんは僕らの方に視線を移す。そして、正座をしたまま頭を下げた。「お見苦しいところ見せてしまい、申し訳ありません」

緋明さんとは違い、深すぎず浅すぎないお辞儀。凜とした姿は彼女の容姿とも合っていて、やはり火の巫女って感じがする。

姉妹だから、火の血が少し入っているのでしょうか？

頭を下げた後、ゆっくり顔を上げたメイさんは僕達を見て優雅に微笑んだ。

「改めて、初めまして。メイと申します。以後、お見知りおきを……と言いたいところですが、忘れてくださった方が助かりますね」

「メイちゃんっ！」

メイさんの言葉に、さっきまでの態度とは一変して眉を吊り上げた緋明さんが叱責する。声は少し大きかったですけど、全然恐くないです。

だからなのか、それとも慣れているのか、怒られてもメイさんの表情は少しも変わらなかった。その様子に、僕は気付かれないくらいに眉を顰める。メイさんの凜々しくも、上品な笑み。それに少しの違和感を覚えた。

確かに最後の一言のせいもあるかもしれませんが、それだけじゃないです。

笑っているはずなのに、目が笑っていない。笑っていないどころか、感情が読み取れなかった。事務的、機械的の表現が妙に合う。

「では、失礼致します」

その笑みを張り付けたまま、軽くお辞儀をする。

「メイちゃん待って……！」

スツと物音一つたてずに立ち上がると、妹の制止も聞かずそのままどこかへいってしまった。

*

「よろしかったのですか？」

メイちゃんが立ち去った後、置いてかれた私を気遣うように優里さんが声をかけてくれた。

心配させないように、わたしは精一杯の笑顔を作る。

「はい。いつものことですから」

そう。いつものこと。メイちゃんが人前を嫌うのは昔から。悪いのは彼女じゃない。人を避けて生きてこなきゃいけなかった。だから人前に出るのは苦手になってしまった。

わかってる。わかってるけど

…けど、さみしいよ。

「すみません」

「どうして緋さんが謝るんですか？」

「メイちゃんが…姉があんな態度を取ってしまうのは、わたしのせいだから」

今のわたし、どんな顔してるかな。きっと情けない顔してるんだろうなあ。こんなんじゃない、またメイちゃんに怒られちゃう。

「わたしが火の巫女として、その証を持って生まれてきちゃったから」

この色さえ持って生まれなければ、きっとメイちゃんもあんな風な扱いを受けなかった。

「言葉が悪いけど、メイちゃん存在が霞んでしまったのです」

証が無かったら、きっと“普通”に生きれた。わたしだけじゃなく、メイちゃんも。

あんなに優しい人を追いやったのは、日陰者に育てたのは、巫女を大切に思う人々。

「だから、わたしが悪いんです」

幼い頃の、いいなりだったわたしを呪いたくなる。自分を通せな

かったから、メイちゃんがこうなってしまった。
今のわたしが大切なのは、“みんな”じゃない。緋をみてくれる、メイちゃんだけ。巫女は“人々”を切り離せないけど、わたしは彼女以外の“人”はどうでもいい。
どうやったら、あの人を幸せに出来るのかな。

*

よく内容が見えない話をした緋明さんは、少しして何か思い出したようにハツとした顔をした。

その理由は問わない。触れたら引き返せなくなるから。

「すみせん。お疲れですよ。今お部屋に案内します。今日はゆっくりとおやすみください」

我に返ったらしい少女は、苦笑しながらそう言う。

それから僕達はそれぞれ部屋へと通された。

「姫様？ どうしました？」

月が空高く登る時刻。

いつかと同じく姫様はぼんやりと窓を眺めていた。どこを見るでもなく、ただ外を見ていた。

「…あの2人…」

外を見たまま、視線を逸らすことなく姫様がぼつりと呟いた。静寂の中ではないと聞こえない小さな声で。

「緋明さんとメイさんですか？」

僕の問いに、無言のままコクンと頷く。そして変わらない声量で囁くように言った。

「二人で一人」

唐突に言われる、よくわからない言葉。

二人で一人？ 一緒じゃなくて、一人？

姫様は何を言いたいのでしょう？

「どういう意味ですか？」

わからないから訊くしかない。けれど、その質問の答えは返ってこなかった。

なんの反応もないため沈黙が訪れる。

そんな中、不意に姫様の頭がカクンと下に落ちた。顔を上げたかと思っただら、その後も上下にユラユラとさせる。

まるで、眠りに落ちる子供のようにですね。

微笑ましく思いながら姫様に近づいた。

布団に寝かせるために椅子に座る姫様を抱き上げる。心配になるくらいに軽い身体。壊れ物を扱うように優しく抱く。

僕に抱かれた姫様は笑みを浮かべるわけでもなく、人形のように無表情。起きている時と違い、そのお顔からは可愛らしさが消えて美しいものとなる。

「…もうすぐ、一人に…なる」

布団に寝かせるとき、姫様は確かにそう呟いた。

10-3 火の神子と少女。(後書き)

見てくださった方、見てくれている方、ありがとうございます。本当にありがたいですっ！

前の話から大分日にちが経ってしまいました。楽しみにして下さっていた方がいらしたら、すみませんでしたm(_____)m
これからは一日から三日に一話のペースで書く予定ですので、見捨てないでください(泣)

お知らせ。

前話の最後の方を少し変えました。読み返さなくても、話の流れは変わっていないので大丈夫だと思いますが、念のためお知らせです。

11-1・緋明の名と二人の姉妹。

お城を出て、数日が経つ。

外の世界は姫様にとつて“初めて”がたくさんあり、それを知っていくことが楽しそうだった。普段変わることはないその顔が僅かに緩んでいるのを見つける度に、微笑ましくついで僕も緩んでしまう。

この機会は丁度良かったかもしれませぬね。

遠目から、緋明さんと一緒にいる姫様を見てそう思った。

理由はなんであれ、彼女がいるいろんなモノを知ることができる機会だから。

「悠詩っ」

僕に気付いた姫様が名前を呼ぶ。きつと、自分の所に来いと言うことだろう。もう少し言葉を付け加えてくだされば、わかりやすく助かるんですけどねえ。

そう思いながら苦笑したい気持ちを押さえ、若干早足で姫様の元に向かい、どうしましたと訊ねる。

「コレ…」

そう言つて差し出された小さな手の上に乗っているのは、箸という名の二本の棒。お城ではフォークやスプーンなどを使って食事をしてきたが、緋明さんのお屋敷ではこの箸を使う。

食事の中身もお城とは全く異なっていた。主食もパンではなくお米です。

「お箸がどうしたのですか？」

差し出されたものの、これを僕にどうしろというのでしょうか。

不思議に思っていると、姫様は視線をテーブルへと移した。それを追ってみるとそこにはお皿が二枚があり、片方の皿に小豆が十粒

程度が乗っている。

「さつきまで、成悠姫様がお箸の練習をしていたのです。悠詩さんもどうですか？」

笑みを見せながら緋明さんが言う。最初の頃より大分緊張は解けているらしく、その笑みは無理してのものではない、人柄に合った穏やかで優しいもの。

それに反して、僕の顔は少し暗くなってしまう。

「…お箸の練習ですか」

正直、面倒くさくてやりたくない。使い慣れないお箸は、食べたものを上手く口まで運ぶことが出来なくてイライラする。

ここに留まるのは一時。ずっと居るわけではないし、別にここにいる間だけ我慢すれば平気だろうと思っていたため、練習しようなんて思っていなかった。

適当に断ろうか……

なんて思ったのに、出来なかった。

「悠詩も、一緒に練習」

子どもみたいな片言言葉で姫様が言う。大きな二つの双眸は僕を捉えている。その目には命令的なものが無い代わりに、もちろんやるよね？なんて言う期待が満ちていた。もう少し表情が現れるようになったら、キラキラした目というのがびったりになるんでしょね…。

軽く現実逃避をしてから返事をする。

「…わかりました」

純粹無垢でキラキラした目を見て断れますか？ 姫様相手に僕がそんなことするなんて絶対無理です。

内心、自分の弱さのため息をつきながら僕は練習に参加する事を決めた。

*

「上手になりましたね、お二人とも」

そう言った緋明さんは、まるで自分のことのように嬉しそつだつた。

「…お箸つて大変なんですね」

体力消耗したような沈んだ声を自分が発する。おかしいですね、活発に動いたわけではないというのに。

小一時間ほど、小豆を箸で搦んで皿に移すという地味に神経を使う作業をしていたため疲れた。何故だか眉をかなり寄せていたようで、眉間が結構痛い。

指で固まっている眉間を揉んでいると、クスクスといった笑い声が聞こえた。

「すみません、笑ってしまつて。けれどお箸つて普段使わない方々にとつて、とつても難しいものなんですね。勉強になりました」

人を馬鹿にしたような笑いではないのがわかる。彼女はそんな風

に人を笑うことはしないんでしょうね。

まだ数日しか共にいないけど、そう思う。じゃないと、常識と言われるものすら知らない姫様のお相手なんてできないでしょうから。笑う緋明さんに悪意なんて全く無いのがわかつているから、僕は苦笑しするしかない。

「では、そろそろ失礼します。姫様、行きますよ」

そう言つて立ち上がるうとする。けれどその前に、コテンと何か

が僕の膝の上に落ちてきた。見ると、銀髪の頭が上手に乗つかつているではないか。

顔を近づけて見ると、スーと寝息が聞こえた。いつの間に寝てたんですか。

「…成悠姫様？」

「……」

突然倒れられた姫様を、緋明さんは不思議そうに見ながら名前を呼んだ。しかし返事は返ってこない。どうやら熟睡しているようです。

「どっとうしたのでしょうか？」

返事がないことを不安に思ったのか、急にオロオロとした緋明さん。いいから落ち着いてください。ただ寝ているだけなんですから。

わけもなく手をせわしなく動かす緋明さんに、僕は軽くため息を吐いてから言った。

「大丈夫ですよ。眠っているだけですから」

「寝てる？」

動かしている手をピタリと止めて、目を点にしながら、確認するように疑問系で緋明さんが言葉を発する。

姫様のこの状態を見て、寝ていると言わずに何と言つのでしょうか。

「きつと普段使わない神経を使ったせいで疲れたのでしょう。…遊び疲れた子供が、すぐに寝つく様子みたいだとも思ってください。説明してみると「ああ…！」と言いなながら頷く緋明さん。

…わかってくださるのは嬉しいんですけど、「子供が…」等で納得されるのは少し微妙な気持ちです。

まあ、何はともあれ緋明さんは落ち着いてくださいましたし、どうしましょうかね？

抱き上げて部屋まで運んでもいいが、生憎と姫様が枕にしているのは僕の足。立ち上がるために、その頭を床に下ろさないといけないのはわかってはいるのですが、少し勿体無い気もするのです。

うーん。と悩んでいると、緋明さんが提案してきた。

「あの…、ここで少し寝かせてあげては駄目ですか？ 起こしてしまつのは可哀想です」

僕の膝から姫様の頭を下ろす拍子に、起きないとも言い切れない。

「こう、安心した顔でぐっすりと眠っているのに起こしてしまうのは忍びない。」

「そうですね、急ぐわけではありませんし！」

「そうですね。では、もう暫くここで寝かさせていただきます」
「姫様が起きるのを危惧してです。もちろん、僕の下心が全てではないですともっ！」

言い訳じみたことを思いながら、緋明さんの提案に賛成の意を伝える。

すると、にっこりと笑って

「では、お茶入れてきますね」

と言って一旦部屋から出て行った。

都夜のように傲慢でもないですし、優里のように一癖あるわけでもなくて、良い女性ですねえ。

緋明さんの後ろ姿を見ながら、しみじみとそう思った。

11-2・緋明の名と二人の姉妹。

「悠詩さんって、成悠姫様にとって心を許せる大切な人なんです
ね」

眠っている姫様を見て、緋明さんがそう言った。唐突に何を言
出すのでしょうか、この人は。

「何故、そう思うのですか？」

問うてみると、柔らかく笑って答えてくれる。

「とつても無防備ですから。人前で眠るって、結構警戒するものな
んですよ？」

…無防備。姫様は誰に対しても警戒しませんが？ 現に今、僕だ
けが部屋にいるわけじゃないのに眠っていますよ？

なんて思っていたのが顔に出ていたのでしょうか。緋明さんはう
んと唸りながら言葉を続けた。

「その顔を見ると、わたしが思っているのと意味合いが少し違いそ
うですねえ……」

どういう意味ですか？

わからない僕は、ただ首を捻るしかない。

「人って“ひとり”だと不安定になったりしますよね。人数を表す

“一人”の場合でも、孤独を表す“独り”でも」

「言っていることはなんとなくわかりますが、先程の話と何の関係
が？」

彼女が何を言いたいのかわからない。けれども緋明さんはそれ
に答えずに話を続ける。

「部屋に一人でいると心細くなることがあります。それは孤独が強
くなるからです。そんな時、誰かが傍に居てくれると心が休まりま
す。けれど、その場合は“誰”がということとはあまり重要ではあり
ません。優しくしてくれる“誰か”でいいのです。……しかし、大
勢に囲まれていて“独り”を感じた場合は違います。敵か味方かわ

からないその場所にいるのは苦痛にしかありません」

そう言った緋明さんの顔が若干苦々しいものになったのを、僕は見逃さなかった。

けれど気付かないフリをする。今はまだ、それについて触れるべきじゃない。

「大勢の人がいるとき“独り”を感じた場合、“誰か”じゃダメなんです。優しくされたって、疑り深い心がそれを信じられない。けれど本当に心を許せる人が傍にいてくれたら、それだけで強張りを解くことができます。“この人がいるから大丈夫” そう思うから、ずっと警戒しないで済むんです。姫様もきつと、悠詩さんのことをそう思っているんじゃないのかなって、わたしは思うんです」

オドオドしていて頼りないようなイメージだったのに、自分の意見を言っていた時の彼女はとても凛々しく見えた。まるで、噂に聞いていた火の巫女のように。

「どうやら、しっかりと自分をお持ちの方のようですね。あなたを見くびっていました」

てつきり、意見すら人に言えないような弱々しい人だと思っていた。だが、さっきの様子を見る限りでは、自分が本当に伝えたいことになるかと周りを気にせず話することが出来るようだ。

自分が思ったことを主張する、というか熱弁する。噂に違わず、熱血っぽい所があるようですね。

今までの思い違いに僕が苦笑していると、キョトンとした顔をした緋明さんが、数拍置いてポンツと湯気が出そうなくらい急激に赤くなった。

「あわわわわわっ！すみませんっ。なんか出しゃばったことを……」

慌てふためく少女には、先程の凛々しさなど欠片も見えない。

どちらが素なのでしょうか。両方でしょうか。それとも、全てが嘘なのでしょうか。

11・2・緋明の名と二人の姉妹。（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。アクセス数を見て、少しニヤケる今日この頃です。

かなり短い回となってしまいました。まるでオマケのような、中途半端なお話に。

代わりに、次は少し長くなるかも？です。

11-3・緋明の名と二人の姉妹。

あれつきり、下を向いて黙り込んでしまった緋明さん。たまに姫様を見る目は優しそうだが、僕の方は一切見ない。

静かなのは助かりますが、この空気は微妙に重いです。暇ですし、気になったことでも教えてもらいましょうか？

「緋明さん」

「ははははいつ！？　なんでしようかつ？」

呼ばれた少女は頓狂な声を上げて返事をする。…名前を呼んだぐらいで、そんなに驚かなくてもいいではありませんか。

「落ち着いてください。まあ、相手は男だし、緊張するのはわかりますが」

「と言ってはみるけれど、さっきまで普通に話してたじゃないですか！　っていうのが本音です。なんでいきなり緊張しているんですかね？」

「あつ、いえ。悠詩さんといても緊張したりしないですよ？　顔が女の子みたいで可愛いから、男の人って感じしないですし」

緊張してないなら良かったです。その後が続いた言葉は気になりますけどね。

僕の頬がちよつとばかり引き吊ってる感じがするのだが、彼女は気付いていないようだ。

「けど、本当にお綺麗な容姿をお持ちですよ。男の子で美少女な見た目の人って初めて見ましたよっ！　初めて会った時なんか、絶対女の子だと思ってましたもん」

興奮しているらしく、若干頬を上気させて言う緋明さん。その顔は先程と打って変わって明るいものになっている。彼女に憧れているものがいたら、気絶しそうな程の可愛い満面の笑み。

そんな無邪気な笑みを見て僕は思う。

ああ…、彼女が巫女じゃなければよかったのに。巫女じゃなければ……
殴れたのに。

心の底からそう思った。そりゃあ、思いたくもなりませんとも。

…だって、可愛いと言われて喜ぶ男がどこにいますかっ!?!? …
いや、世界中探せばいるかもしれませんが…。けれど、僕は断じてそんな趣味は無いです! 有りたくもねー! …ですよ。しかも! です。なぜ僕の顔を見ると、それも男だと知ると目を輝かせる女が…いや、女性が多いんですか! 挙げ句の果てに着せかえ人形にされるし。それも女物。…ざけんな。オレは男だっ! !

…おっと、失礼いたしました。

言葉使いが汚い上に、一人称が…。きっと幻聴であり幻覚です。誰も聞いてないからいいんですよ。いじけるどころか、危うくキヤラ崩壊するところでしたが気にしません。

このままでは、素がバレそうなので本題に戻ることになります。わざとらしく、ゴホンと咳払いをしてから僕は口を開いた。

「その話は置いて、緋明さんに教えていたきたいことがあるのです」

まだ興奮状態が抜けきれてないのか、僕が話しかけても怯えずにむしろ笑顔で「なんですか?」と普通に返事をしてくれる。

僕としてはかなり微妙な感じですよ…。まあ、どうせその笑顔もすぐに崩れるでしょうけどね。

「この家と緋明さん達についてです」

単刀直入に言った。遠回しに言うのは面倒くさくて嫌いなので。

けれど、わけがわからない。とでもいうような顔で緋明さんは僕を見る。

騙されませんよ？

そんな思いを込めて、僕は薄く笑った。

きつと彼女のその顔は“フリ”だろう。何を聞かれるかくらいはわかっているはずだ。というか、わからないほどの馬鹿だったら切り捨てますよ、即刻に。

「メイさん、でしたっけ。あなたのお姉さんは今どこに？」

「…家にいるはずです。一緒に住んでいますから」

僕の質問に若干目を伏せながら緋明さんは答える。

「そのわりには、最初会った時以来、見かけていないんですよ」

「…この屋敷は広いですから。たまたま会わないのでしょうか」

「けれど、姿すら見ていないですよ？」

いくら広いからといって、何日も何日も相手を見かけることすらしないなんてことあるんですかね。意識していないならともかく、きちんと探しているというのに。

それに、おかしいことは他にもあった。

「あと屋敷についてですが、侍女らしき者を一人も見えていないんですよ。巫女のお屋敷なのに、です」

巫女というのは王族並に偉い立場、高い位がある。巫女が女である以上、男を置くことはそうそうないが、身の回りの世話のために侍女ぐらいはいるものだ。なのに、この屋敷でそれらしき人物を見たことがなかった。

それどころか、僕達以外に人の気配が無い。

世間一般風に言うなら、不気味だ。

僕の言葉を、緋明さんは目を伏せたまま聞いていた。その姿を見て、何人の人が彼女に同情するだろうか。端から見たら、絶対に僕が悪役なんでしょうね。

人事のように思いながら、僕は言う。

「話を聞かせてくださいますよね？」

訊ねる形は取ったが、拒否権を与える気はない。だからその言葉は本当に形だけのもの。当たり前ですよ。大切な“情報”を、僕が

逃すはずないではありませんか。

きつと拒否権が無いことを悟ったのだらう。悲しそうに緋明さんが「ふふっ」と笑ったあと、ポツリと零した。

「ほっとしては、くれないんですね」

消え入るような小さな声で彼女は呟く。訊いているわけでもない言葉に、それでも僕は答えた。

「“情報”は多くて困ることはありませんからね」

僕にとって、彼女に話を聞くのは情報を得るための手段にすぎない。多数の情報を集めて、自分なりの真実を見つけるためのものだ。彼女はそのため材料。

話すことで相手が傷つこうが、どうなるうが関係ないし、気にしない。

いつまでも目を伏せたままの緋明さん。さすがに我慢の限界が近づいてるんで、さつさと話していただけませんか。僕は意外と短気なので、いつキレるかわかりませんよ？

自分を抑えるのも面倒くさいなと思っていると、少ししてまた笑い声が聞こえた。今度はどこかおかしそうに笑っている。

「率直に言うんですね。他に言い方があつたでしょうに」

「騙されたかったのですか？」

「いいえ」

答えて、緋明さんは顔を上げた。そして柔らかく微笑む。

「悠詩さんになら、話しても大丈夫そう」

人を信じ切っているような言い方が癪に障る。急に何なんでしょう、この人。

「買い被らないでください。裏切らない保証はないですから」

必要とあらば、あっさりと裏切りますとも。

突き放すように言ったというのに、緋明さんはまたおかしそうに笑う。

「信用できる人ほど、そう言うことを言うんですよ。逆に、自分を信じてください。なんて言う人の方が、わたしは信じられないです

ね

そして一瞬、嘲りが混じる。口の片端を不自然に歪ませていた。

「大抵、そんな人ほど嘘つきなんですよ」

皮肉っぽい笑みを張り付けたまま、ぼそりと呟かれた言葉。彼女に似合わず、かなり寒々しいものだった。

「姉と、この屋敷について、ですか…。おもしろい話ではないですけど、構わないですか？」

首を傾げながら僕を見る。さっきの薄ら寒い気は無くなっていった。「話してくださるのですか？」

つい訊いてしまうと、緋明さんがプツと吹き出してから笑い出した。

「だって、拒否権はきつと無いんでしょう？それに、いずれは話さなくてはいけないことだから、無駄に抗ったりはししないでですよ」

その声には先程の嘲りのようなものは欠片もなく、ただ僕の発言がおかしいと笑っている。

確かに、まあ…変かもしれませんがね。自分から訊いたわけですし、答えなかつたりしても無理やり言わせようとはしてましたからね！。けど意外だったのですよ、こんなにあっさりの良い返事をいただけるなんて。もっと渋るものかと思っていたものですから。

そんな心中を口には出さしないで、じつと緋明さんを見てみた。少しでも“情報”を逃さないために。見極めるために。

視線に気づいたのだろう、緋明さんは僕を見ると明るい笑顔を引っ込めた。

代わりに、目を伏せながら淡く笑う。

「では、お話しますか。私達の生まれと、この家について」

11-3・緋明の名と二人の姉妹。(後書き)

前話から、早一カ月。

三日以内に……、とかいう心意気はドコに消えたのでしょうか…。
なんて、ひとり逃避してみる作者です。

今回の話で11話は終わらせようと思っていたはずが、終わりませ
んでした。

いつもの二倍までなら、更新しちゃえっ！とか思ってたのに、三倍
になりそうなので止めました。

ということ、11話自体はあと2話分はある予定です。

長らくお待たせしてしまい、すみませんm)——(m

今年中には『火の巫女編?』は終わらせられるよう頑張りますので、
これからも読んでいただけたら幸いです。

11-4・緋明の名と二人の姉妹。(前書き)

今回は悠詩ではなく、緋の視点になっています。
あらかじめ、ご了承ください。

11-4・緋明の名と二人の姉妹。

同じ年、同じ月、同じ日に二人の赤子がこの世に生を受けた。それが、ことの始まり。

「わたし達は“双子”として、この家に産まれました」

意を決して一言目を発したら、悠詩さんの表情が苦いものへと変わった。

「双子、ですか……」

女の子みたいに可愛いお顔が歪められる。きっと、双子として生まれた者がどうなるのか知っているんだろうな。知らないでいてくれた方が嬉しかったんだけど……、仕方がないよね。

どうにもならないことを心の中で苦笑しながら、わたしは頷く。

「はい。だから、運が悪かったら私は死んでました」

これは誇張でもなんでもない、ただの事実。

本来、一人の女性から一度に産まれる子の数は一人。それを普通としてきた人々の前に、二人の赤子が産まれたらどうなるか。…喜ばれなどしない。むしろ、異質とされて忌み嫌われる。

“双子”は“忌み子”。あつてはならないモノたち。

だから、無かったモノとして片方が消される。それが双子として産まれたどちらかの子供の運命。

なんの罪もない赤子を殺すことに否を唱える人は少ない。二人産まれてきたこと事態が罪であり、そうすることが正しいと人々は思っているからだ。たとえ声を上げた誰かがいても、逆にその人が非難を受けてしまう。だから、いつまでも繰り返される。罪無き……どころか、悪すら知らない赤子の死はなくならない。

そして誰もが、その行為は人を殺めることと同じだなんて気づかない。

「本当は二人目である、わたしが殺されるはずでした」

「けれど、巫女であるあなたは殺せない」

感情のこもらない声で悠詩さんが言う。

暗に「巫女でなければ殺されていた」っ言っているのが聞いていてわかる。容赦ないなあ。まあ、実際そうなんだけどね。

けど、少しだけ違う。

「正しくは、巫女の証である“色”を持っていたから殺されなかったんですよ」

火の巫女を表す赤。髪と目にその色を宿していたから生きられた。神を信じ、崇拜するこの世界の人々は、神に仕えている巫女を殺すことはしない。巫女は神に近い者とされており、巫女を傷つけることは神を傷つけることと同じだと思ってるから。

だから

「お陰で、姉が殺されそうになりましたけどね」

証を持たない双子の片割れに矛先が向けられるのは、深く考えなくてもすぐにわかること。人々からすれば、二人じゃなくするためどちらかを処分すればいいだけの話だからね。

「けれど、殺さなかった。それとも殺せなかったのですかね」

鋭い指摘。

やっぱり悠詩さんはすごい。侮れないな。最初から侮るつもりはこれっぽっちも無かったけど、改めてそう思った。

「後者の方が当たりです。誰一人として彼女を殺せなかった。理由は……悠詩さんなら勘付いているんじゃないですか？」

聡い人だから、おおよその見当くらいはついてるだろう。その確信を持って訊いてみたんだけど、若干顰めっ面になってるのはなんでだろ？

「…確かではないことを話すのはあまり好きでは無いのですが……。僕の見立てでは、メイさんもまた“巫女”だったのではないかな、と」

わたしが思った通り、真実に近いことを答えてくれる彼を見て、

思わず感嘆してしまう。

「…さすがですね」

普通の人なら、そんなこと思いつかないだろう。忌み子達が巫女だなんて誰が思う？少なくとも、この世界の人間じゃ思いつかないんだろうな。

悠詩さんの場合、かなり聡い。ただ賢いだけではなく、聡くて頭の柔軟性がある。

けど、彼の解答では少しばかり不十分。

「悠詩さんが言った通りです。メイちゃんもまた“巫女”でした。けれど、彼女は色を持っていなかった。持っていたのは“力”だけ。そう、目に見える証をメイちゃんは持っていなかった。だから殺されかけた。けど、まだ抵抗も出来ない彼女を助けたのはその“力”。

「刃を持った人を、赤い炎が包んで焼いてしまったららしいですよ。恐ろしい光景だったろう。目の前でいきなり人が焼け死ぬのだ。それも、忌み子の片割れを殺そうとして。

「幼子の時は、神様が巫女を護ってくださいさるらしいですからね」
呆れた声音で悠詩さんが言った。同情なんてものは全くない。それは誰もが知っていることだから、呆れたい気持ちもわからない。けど、わたし達は例外中の例外だ。

その人達は馬鹿ですか。なんていうことを心底呆れた目で訴えてくる悠詩さんに、わたしは苦笑するしかなかった。

「仕方がないですよ。彼らは、メイちゃんが巫女だと思ってなかったんですから」

普通は巫女は“色”と“力”の二つを持って産まれてくるものだ。それなのに、メイちゃんは“力”は持っていて“色”は持っていないかった。

「まあ、わたしはわたしで“色”しか持ってないんですけどね」
その一言に、悠詩さんが眉を顰めた。

「どつという意味ですか…？」

訝しむような声に、「言葉のまんまですよ」と軽く息を吐いてから答える。

「わたしは目に見える証を、メイちゃんは目に見えない証を持って産まれたんです。二人合わせて一人の“巫女”なんですよ」

わたしに“力”は無かった。

きっと神様の御加護があったメイちゃんと違って、わたしはあっさりと殺されていただろう。“色”を持っていたから刃を向けられなかっただけ。色持ちの時点で誰も確かめようとはしなかったから、わたしに力が無い事を知っている人はいないけどね。

「なぜ、二人で一人の巫女だと言えるのですか？ たまたま片方ずつだけ持って産まれたのかもしれないよ？ 稀にそういう方はいますから」

未だに疑り深い眼差しを向けてくる悠詩さん。本当、頭の回転が速くて困っちゃう。コレはあんまり言いたい事じゃないのに。

思っていて、口に出さないわけにはいかない。仕方がなく、ゆっくりとだが話し始めた。

「神様から頂いた名前が、同じだったのですよ」

名前というのは物心ついた頃に神様から貰うもの。といっても直接貰うわけではなく、ある日突然名前を思い出すのだ。思い付く、閃くって言葉にすることもあるけど、わたしは思い出すの方がしっくりくる。

“今のわたし”になる前の、ずっとずっと“昔のわたし”も同じで、その名前を受け継いでいるんだと思っっているから。だからあえて思い出すって言うてる。

…と、あれ？ 話が微妙にズレちゃった？

ま、まあ、本題に戻ろうかな。

「名前は、一人一人違う名を神様から貰うものだというのはご存知ですよ？」

わたしの言葉に、心外だともいうような顔をした。

「この世界の常識ですからね」

子供が拗ねたような言い方に、わたしは笑ってしまう。だって、可愛いんだもん。

「そうですよね。なのに、わたし達は同じ名前なんですよ」

笑いながら言ってしまった、笑い事じゃない事実を聞いて、悠詩さんの顔に衝撃が走る。

「…同じ、名前…？」

信じられないって顔。悠詩さんでもそんな顔するんだなあって、笑いも引っ込めてじっくり見てしまった。驚いた顔してても可愛いなんて、美少女って得するなあ。

決して口にはしてないのに、そんなことを思った瞬間に睨まれた。おかしいな、口に出してないのに……。

「こっ恐いですからその顔やめてくださいっ！」

思わず涙目で叫んじゃった。だって、…本当に怖い。

抗議したお陰か、すぐに睨むのをやめてくれた。良かったあと、ほっとしたのも束の間

「さっさと話の続きしてくれませんか？」

ニツコリ笑って悠詩さんが言った。

笑ってるはずのその顔が怖いと思ったのは、わたしの気のせい、じゃないよね……？

11-5・緋明の名と二人の姉妹。

緋明さんから、不気味なこの家のお話を聞いた。もともと何かあるんだろうなとは思ってましたけど、こんなに面倒くさい内容だなんてねえ……。

ため息を吐きたいのをこらえて緋明さんを見る。余計に深い息を吐きたくなったのは言うまでもありません。

「物心ついた頃、わたしと姉は親たちに教えるよりも早く、お互いに名前を教え合いました。その時初めて知ったんです。二人とも同じ名前なんだって。音も字も同じ“緋明”だなんて、知ったときはびっくりしましたよ」

笑いながら言う目の前の少女を小突きたい。全く笑い事じゃないです。というか笑えないです。

名が同じというのは、その人達もまた同じ存在だということを表す。神が生きるもの全ての名をつけると言われているこの世界では、何かと同じということはあっても、誰かと同じ名前ということは無いに等しい。

「幼いわたしたちは、それを知ってもどうすることもできず……というか、当たり前だと思ってたんですよね。同じ名前ってあるんだって思ってた、のに」

言葉を止めて、緋明さんが目を伏せる。そして短いため息を吐いた後、自嘲気味に笑って話を再開した。

「バカですよ。そのまま正直に親たちに言ってしまったんです」その一言を聞いただけで、なんとなく察してしまった。二人の名を知った人たちがどんな判断をして、どんなことを二人に強要したのか。答えを聞かなくても彼女の顔を見たらすぐにわかりますとも。それでも、僕から言う気はありませんけどね。

そんな内心を知ってか知らずか、緋明さんは僕の顔を見て苦笑した。…この顔を見る限り、絶対わかっていそうですね。僕ってそんなにわかりやすいのでしょうか？

少し考え込みそうになったところで、緋明さんが口を開いた。

「きつと、悠詩さんはもうわかってしまったんでしょう？それでも、続きをわたしに話させるんですか？」

継るような問いには、ざっくりと容赦なく答えた。

「もちろんですよ」

彼女の口から本当のことを聞かない内は、僕が考えたことは想像の域を出ない。僕が知りたいのは、真実や事実です。自己満足な想像で終わらせる気は無いのです。だから、あなたに訊いているんですよ。

言葉にしない代わりに、にっこりと微笑んでやった。てっきり反論が返ってくるかと思っただのに、緋明さんは「それもそうですね」と素直に頷く。

「じゃあ、話の続きをしますか。…どこまで話しましたっけ？」

首を傾げるその仕草は、はたから見れば可愛らしく見えるんでしょうね。僕としては殴りたくなるだけですけどね。

「あなたたちの名前を馬鹿正直に、親御さんに話したところまでです」

「……？わたし、馬鹿正直にって言いましたっけ？」

「さあ？」

少しばかりイラツとしたので、笑顔を浮かべたまま適当に返しておく。いいですよ、これくらい。仕返しの内にも入りませんよね？

一方の緋明さんはハテナマークを頭上にたくさん浮かべた顔をしてから、まだ若干不思議そうな顔をしつつも話を再開した。

「知ってしまった親たちは驚き、恐れ、そしてわたしたちの存在をどうするか親族の方々と議論しました」

彼女たちはやはり“忌み子”だ。殺さなくては。

けれど巫女は殺せない。
ならどうする？

そんなとき、親族の中の一人は言った。

同じ名ということは、元は一人の巫女だったのだろう。ならば、一人に出来ない代わりに、存在を一つにすればいい。“色”ある者は表に、“力”あるものは陰に。陰は人目に付かないように隠せばいい、と。

「それからです。姉は、生きているのに存在を消された。名を聞いてから子供を公表するという決まりが、役に立ったみたいです。公表されるまでは、親族以外誰一人としてわたしたちのことを知る者はいないから、隠蔽するのなんて簡単だったでしょうね」

嘲るように鼻を鳴らす。その嗤いは、誰に対してのものなのでしょうかね。時々見せるその顔が苦しそうに見えるのは、僕の気のせいですよ？きつと。

「神様は、“同じ存在”だということを認めさせるような名をわたしたちにくれました。けれど、それは“巫女”の名なんですよね。だから、わたしたちは二人で名前を分け合ったんです」

「色を表す“緋”をあなたに。お姉さんの方には“明”を、ですか……？」

「そうです。わたしたちは緋明という一人の巫女ではなく別々の人間だと、自分たちに言い聞かせるために、ですかね」

そう言いながら穏やかに微笑む緋さん。それを見て、なんだか無性に意地悪しなくなかった。

「自分たちが一人の人間だったら……とは、思わないのですか？」
不意の質問に、一瞬面食らった顔をした緋さんは、すぐに微笑んだ顔に戻る。

「思わなかった、と言えば嘘になります」

彼女の答えに、つい、目を細めてしまう。はっきりしないその言葉が僕を軽く苛立たせた。

しかし、答えはそれだけで終わらない。けど…、と緋さんが続ける。

「もし、わたしたちが世の中で言うところの正常で産まれてきていれば、どちらかはいなかったわけでしょう？　なら、良かったかなって思うんです。明ちゃんに、会えたから」

嫌なのは、明ちゃんが表に出れないことですかね。逆だったら良かったのに…。そう言って笑う顔は、最後には苦笑いになっていた。「明ちゃんが姿を現さないのは、誰かに双子の存在を知られないようにするためです。バレてしまったら、今までの苦労は水の泡ですからね」

話しきつたとばかりに息を吐く、その顔はただ穏やかだった。屈託もなく、何の混ざり気のない、そんな表情が似合うと彼女の顔を見ながら僕は思う。顔のつくりもあるんだろうけど、根本となる性格みたいなのを覗いたとき、思わずにはいられない。

自嘲したような笑いよりも、春の日差しのような温かくて柔らかい笑顔の方が似合う、って。

と言っても、そんな顔させたのは僕なんですけどね。細かいことを気にしてはいけません。

「あなたのお姉さんを見なかった理由はわかりました。ところで、ここに人気がありません理由はなんですか？」

まだもう一つの疑問は解かれていないんですよ。しらばくれないでくださいね。

そんな思いを込めて、雰囲気を変えるためにっこりと笑う。なんだか、話は終わり。みたいな雰囲気でしたが、流されませんよ。流されてたまるものですか。

すると緋さんは「あ、そうでしたっ！」と慌てて話し出そうとする。…もしかして忘れてたとか言いませんよね。言わなくても、そんな感じではありませんが。

ボケ……失礼しました。天然な緋さんは話し始めようと口を開こうとして、結局閉じてしまった。訝しげに見ていると、相手の目は僕の顔よりかなり下の位置に向いていることに気が付く。そして視線を追っていくと、緋さんが口を閉じた理由らしきものが目に入った。

「…お目覚めでしたか、姫様」

「……」

いつの間にか、姫様が目を覚ましたらしい。といっても、反応の鈍さから見て今さっき起きたばかりなのだろう。目がまだ半分位開いてないのもその証拠だ。

暫くして目を覚ましたらしい姫様はゆっくりと起き上がる。そして僕の方をジツと見つめてきた。視線に晒された僕は当然ながらドキツとするわけですが、甘い展開になるはずもない。

「…悠詩、だっこ」

部屋に戻るから連れて行けということだろう。これのどこが甘いですか？

「はいはい」

諦めにも似た返事をして、彼女を横抱きにしながら立ち上がる。不安になるほどに軽い身体はすぐに持ち上がった。

「では、失礼します」

話の続きを聞きたいという名残惜しさはあったが、頭を軽く下げて退出を伝える。さすがに、姫様の前であんな話はしたくないですからね。

そんな僕の内心を悟ったのでしょうか。先程の話を匂わす発言もせず、緋さんは別の質問を姫様にする。

「夕食はどうしますか？」

「食べる」

「なら、もう少ししたらお部屋に持って行きますね」

そんな当たり障りない会話をして、僕達は部屋を出た。

*

「だそうですよ」

部屋を出て、十字になった廊下を横切るときに僕は呟いた。もちろん、誰がいるかわかっていることだ。

「気づいていたの？」

物陰に隠れていた誰かは、少しの間が空いた後に訊いてきた。足を止め、進行方向を向いたままの僕は口を開く。

「気配には敏感なんです」

それだけ言つて、その場から去つた。

一度も振り向かず、視界に収めようとも思わなかつた僕は、隠れるように立っていた人物がどんな顔をしていたのか知る由もない。

11・5・緋明の名と二人の姉妹。(後書き)

読んでくださり、ありがとうございます。

続けて投稿できれば良かったのですが、またしても遅くなりました。
すみません…。

次はもっと日数が経ちそうな気がしなくもないです。
これからも、温かい目で見ただけいたら幸いです。

12 - 1 明と成悠。(前書き)

12話は悠詩以外の視点になります。

夜も深くなつた頃、アタシは外に出た。といつても屋敷の庭だけ
ど。

ふと見上げるてみると、朝と昼を照らすお日様の代わりに、淡い
光を纏いながら暗闇に浮かぶお月様とお星様が目に入る。決して強
すぎない、優しい明かり。それくらいの明かりが、アタシには丁度
良い。

「ねえ、いつまでそこにいるの？」

唐突に、姿を見せない誰かに訊いてみる。

さつきから、近くに気配があるのに気がついてきた。それも、普
通の人間じゃない気配。屋敷にいるときからずつとついて来るそれ
に、いい加減無視するのも煩わしくなつたアタシは話しかけのだ。

返事が返ってきたのは随分経つてからで、高すぎず低すぎない、
耳に心地良い透き通つた声が背後から聞こえた。

「あなたが、片割れ？」

声につられて振り向くと、そこにいたのは銀色の髪を持つこの国
のお姫様。月の明かりを受けて、神子の証であるその髪はうっすら
と煌めいている。

綺麗だと一瞬見とれると同時に、思っていたのと違う人物がいる
ことに少し驚いた。

「ええ。その表現が正しいかはわからないけれど、もう一人の“緋
明”ではありますね」

驚いたことがバレないように、アタシは平静を装って言葉を返す。
すると、「そう」とだけ彼女は言った。自分から訊いてきたくせに、
それ以上は口を開かない。

けれど、そういう人だということがわかってるから、狼狽える

こともなければ怒りが湧いて来ることもない。代わりに、疑問に思ったことはあった。

「神子様は、お一人でここに来たの？」

まさか彼女だけでアタシのところに来るなんて思っていなかった。だって、悠詩とかいう従者がいつでもぴったりと張り付いているんだもの。きっと神様様が一人だけで出歩くななんてないだろうなと高を括っていた。

ところが、アタシの質問には答えずに少女は違うことを言う。

「成悠」

「なゆ…？」

いきなりの単語に、彼女の意図が読めないアタシはただ繰り返した。神様様はコクリと頷いた後に、幼い子供のようにどこかズレた主張をする。

「わたしは“成悠”。“神子様”って名前じゃない」

まあ、言いたいことはわかる。わかるんだけどね、目の前にいるのは神様様だ。アタシたち巫女よりも神に近い存在。そんな御方を呼び捨てにする勇氣はさすがのアタシにもないよ？

「では、成悠様様とお呼びしますよ。それで文句ないですよね？」
訊ねると、少女はまたコクンと頷く。子供みtainな仕草が妙に似合っていて可愛い。

「さっきのお話の続きですが、成悠様様はお一人で来られたのですか？」

聞きそびれていたことを再び訊ねると「そう」と頷く。

「こんな遅い時間に、よく侍従さんが夜のお散歩を許してくれましたね」

「……」

アタシの言葉に、何の返答もしないお姫様。それどころか、スツと視線をずらしたよっ！？ なんだか嫌な予感がする。

もしかして…

「何も言わないで出てきた、とか…？」

今度は無言のままコクンと頷き、肯定する。

うつわ、予感的中だ。つい、片手を額に当ててしまう。

見るからに過保護そうで性格悪そうなあの人に内緒で、部屋から抜け出してきたなんてやるなあ。目聡そうだったから、気づかないなんてことはなさそうだし……後々、面倒くさそうね。

頭が痛くなるようなことを考えていると、不意にお姫様がアタシの服の袖を引つ張る。何だろう？　と思って視線を向けると、丁度よく目が合った。

「わたしの、せい？」

「はい？」

いきなり何を言ってるの？　思わず聞き返しそうになったけれど、すんでのところ言葉を飲み込んだ。ってか、そんな目で見られたら、何も言えなくなってしまうではないか。

「なんか困ってる。それは、わたしのせい？」

表情はぜんぜん変わらないのに、目だけは不安を訴えていた。なんだか、弱いものいじめしている気分になる。アタシ悪くないのになあ。

怒る気も叱る気も元々なかったし、そんな目で見られたらねえ、下手なことは言えないわ。そう思って、苦笑した。

「少し困ってますかねー。成悠姫様が誰にも言わずに来てしまったようですから」

よくわからないらしく、お姫様はコテンと首を横に倒す。

「ダメなこと？」

「駄目というか、侍従さんが心配するでしょう？」

「しんぱい？」

「どうしたのかな、大丈夫かな、無事かな…とか、相手の安否を気遣うこと」

「それは悪いこと？」

「自分が心配する分では良いですけど、誰かにさせるのはあまり好ましくはないですかね」

言い終わると、暫くしてから「気をつける」という声が聞こえた。本当に気を付けてほしい。彼女のためというか、周りの人のために「ところで、なぜ成悠姫様がここに？」

ずっと聞きたかったことを口にしてみる。キョトンとした顔をした後、至極簡単な言葉でお姫様は答えた。

「あなたと、お話するため」

ん、まあ、そうですね。

「なんのお話です？ 生憎と、外のことはよく知らないので、提供出来るお話はないですよー」

おちゃらけながら言ってみたけれど、その言葉は嘘じゃない。産まれてから一度も、屋敷の敷地以外に出たことがないんだから、知らなくて当たり前だ。

だけどお姫様は首を左右にフルフルと振る。どうやら、アタシが言ったことは、彼女の聞きたいお話ではないらしい。

「じゃあ、なんのお話ですか？」

外を知らないアタシにどんなお話を聞きたいのかななんて思いつきもしなかったから、素直に訊いてみた。その方が手っ取り早くて良い。

アタシに促された少女はゆっくりと口を開く。

「あなたが、人を殺した理由」

可愛らしいお姫様の口から、そんな物騒な言葉を聞くことになった。

生きているもの殆どが寝静まる頃。真つ暗な空に光を纏って浮かぶのは、一つの月と、数多の星。それらは、隠してきた何かを明るみにするかのように、辺りを照らしていた。

「あなたが、人を殺した理由」

騒音がない暗闇の中で、その言葉が嫌になるくらいハッキリと聞こえた。

「何のことでしょう?」

軽く笑いながらとぼけてみる。白々しいのは自分でもわかっているし、誤魔化せるとは思っていないけど一応、ね。

けど、可愛らしいお姫様は予想より遙か上のことを言ってくれた。

「六年前、あなたが人を燃やした理由」

あらら、真面目に返してくださいましたか。「とぼけないで」と言われるものだとばかり思っていたから予想外。にしても、具体的にじゃないかしら?

「よく知っているわね。緋はそのことについて話していなかったはずだけど?」

悠詩という侍従と緋の会話は聞いていたけど、その中で人殺しの話なんて出なかったはずだ。そもそも緋は、アタシが人を殺したことを知らない。もちろん、どういう風に殺したかなんて知るはずもない。

なのに何故、彼女は知っているのか。

話の出所を不思議に思っていると、目の前の少女は思いもしないこと言ってくれた。

「みだから」

「…はあ?」

一瞬、相手が姫様であり神子様であることを忘れて、そんな聞き方をしてしまった。しかしお姫様はというと大して……どころか、全く気にしていないらしい。無礼に当たる物言いにも表情一つ変えない。

少し微妙な気持ちにはなるものの、それはそれで丁度いいんだと自分に言い聞かせる。どうせさつきから敬語なんて使ってないし。良いと思わなくては、この姫様相手にやってられない気がした。

「見たとは、どういう意味？」

「そのままの意味」

お姫様の声は人を遊ぶような声音は少しも混じってはいなくて、あまり前とでもいうように言ってくれる。……いつそ、馬鹿にしてみらった方が良かったかもしれない。その方が希望が持てた。きちんと意味を説明してくれる、という希望が。

しかし、どんなに待ってもそれ以上の返事は来ないし、口を開きそうもない。だから、ため息を吐きたくなるのを堪え、質問を変えた。

「あの日、あなたはここにいなかったはずよ。それなのに、どうやって見たというの？」

6年前のあの日、アタシたちの一族以外はここにはいなかった。もし居たのなら、気配でわかったはずだ。

「その場に居なくても、みることはできる」

「どうということ？」

何を言っているのか。怪訝に思って、反射的に低い声を出してしまう。そんなアタシを気にすることなく、お姫様はお話になった。

「全て視れる。過去も今も未来も全て。対象の何かを見ているとき、望めばその全てを視れるの」

欲しかった答えを貰えたというのに、アタシは茫然としてしまう。嘘でしょう？

そう思っているのに、何故か理解している自分もいた。だって、彼女は“神の子”。何が起こっても、どんな能力が有ろうとも、決しておかしくはない存在。

：理解はしてても、気持ちの整理が出来るかどうかは別問題なわけ。

整理しきれない頭のまま、口を開いた。

「何を、あなたは見ているの？そして知っているの？」

アタシの矢継ぎ早の質問に、姫様はきちんと返事してくれる。感情を読み取れない表情と声音で、事実だけを話してくれた。

「さつきも言った。全て視れる。あなたが何をしたのか知ってる。

あなた達がどうなるのかも知ってる」

「なら、アタシから理由を訊かなくてもわかるんじゃない？」

彼女が知っているはずなのに訊いてくることが癪に障って、皮肉っぽく言ってみた。自分で言っというてなんだけど、腹立つわ、この言い方。

気付かないのか、気にしないのか、姫様はアタシの態度に反応しない。代わりに、ふるふると首を左右に振った。

「視るだけで、言葉は聞こえないし、聴くこともできない」

「えっ？」

意外な言葉に僅かに目を見開く。この流れからして、てっきり何でも出来るのかと思っていた。

そんなアタシの動揺を感じたのかどうかわからないけど、珍しく姫様から話す。

「私が聴くことができるのは“今”だけ」

それっきり、彼女は口を閉ざした。

呆気にとられていたアタシは、すぐに我に返る。そして、ぼつりと言葉をこぼした。

「…人を殺した理由なんて聞いても楽しくないでしょうに」

諦めにも似たため息を吐きながら、彼女を見る。すると何を勘違いしたのか、首を傾げて予想外のことを言ってくれた。

「わたしにそんな嗜好はない」

「大抵無いわよ」

こんなに可愛らしい少女が、しかも自国のお姫様が、人殺しの理由なんて聞いて喜ぶような趣味があったとしたら、国民が号泣するわ。さすがのアタシも嫌よ。

想像してしまったのが良くなかった。げんなりした顔を向けることとなるが、気にするはずもない姫様は無表情のまま言う。

「理由を知りたいだけ」

「……」

何を、とは訊かない。そんなのさつきから話題に出ているんだから、わざわざ考えなくてもすぐに思いつく。

「…なぜ、知りたいの？」

その理由が、どうしてもわからなかった。聞いたところで楽しい話では無い。人殺しの話を聞いて喜ぶような特殊な趣味のお持ちなわけではないのは、さっきの話を聞く限り保証できるだろう、たぶん。

「理由がなくちゃ、ダメ？」

くりんとした大きな瞳がアタシを見る。濁すような物言いが珍しいなと思いつつも、アタシは言った。

「駄目ではないわ。けど、理由があるなら知りたいだけ」

「同じ」

すぐに返ってきた言葉というか単語に、「えっ？」と戸惑ってしまふ。簡潔すぎなお姫様の言葉は、時々意味がわからない。

「わたしも、ただ知りたいだけ」

「……」

またしても、アタシは沈黙するしかなかった。これにどう反論しろと？

可愛らしいお姫様は、アタシをジッと見つめて視線を逸らさない。今更逃げるのも後味が悪そうだ。

はぁ……。と一つのため息を吐いてから覚悟を決める。こうなった

ら腹を括るしかない。

「では、お話ししましょうか」

面白くもない、人殺しのお話を。

12・3 明と成悠 (前書き)

少し長いです。

炎は望む全てを焼いてくれた。それも器用に、人だけを。

「やはり、お前等は忌み子だったのだ」

死に際、一人の男がそんなことを言った。

人を炙る炎とは対照的に、その男を冷えた目で見る。つまらない。どうせなら、命乞いとかしてくれたらよかったのに。

「あの時、殺していれば……!!」

怒り狂った表情で男はアタシを見る。その目には確かな殺意と憎悪を感じた。

ああ、不快だわ。

男を見ても、嫌悪しか感じなかった。同情も哀れみも、何一つアタシの心には無い。

人形のように微動だにせず、その様子をただ眺めていた。醜い肉親が炎に包まれて、ゆっくりとその熱で炙られ溶かされ、死んでいく姿を……。

*

「殺した理由は簡単よ。嫌いだから殺しただけ」

あっさりと殺害動機を話す。嘘は言っていない。幼い頃から、親

と位置付けられている人間も、その他の人間も嫌いだった。

「あの人達は、アタシたちのことを忌み子だと言ったわ。なのに、巫女だから殺せない。困っておくしかなかったアタシたちを、いつも怪物でも見るような目で見ていた」

あるのは憎悪と恐れ。忌み子が巫女だなんてどうしようもなかった。殺すことなどできない。だからこそ、いつか何かが起こるのではないかと、誰しもが囁いていた。

「だから、災いを起こしてあげたのよ。アタシたちを知っている者全てが、炎に焼かれて死に絶えるように」

薄ら笑みを浮かべながら言った。自然と笑っているのか、作って笑っているのか、自分でさえもわからない。

「なぜ、燃やしたの？」

ジツとアタシの目を見ながら、お姫様は問う。彼女しか持ち得ない灰色つばい瞳に、全てを見透かされそうに思えて、思わず目を逸らした。

「…効率が良かったのよ」

たくさんの人を殺すのは一度にやった方が楽。ナイフなどの刃を使って一人一人の命を絶つのは、骨が折れる作業だ。それよりだったら…

「巫女の能力で、一度にたくさんを生を絶つ方が楽だった？」

「そういうこと」

誰かにバレることもない。だって、アタシの存在を知る人なんて、一族以外にいないんだもの。

「各地で人が燃えたのは、あなたの仕業…」

お姫様がぼつりと呟く。アタシを見ていた目は、伏せられていた。「ああ、騒ぎにでもなっていたの？」

まあ、当たり前かもしれない。原因不明の焼死体…いや、何も残らないくらいに燃やしたのだから、遺体が出て来るはずはない。きつと、燃える誰かを見ていた人がいたのだろう。

運悪く目撃した人には申し訳なく思う。奇声を上げ、皮膚が溶か

されて死に逝く姿は、目も当てられないほどひどいモノだったろうから。

「わたしは知らない。けど、悠詩が調べてた」

「悠詩？女顔の侍従さんのこと？」

アタシの声にお姫様は少し悩んだ素振りを見せた後、コクリと頷く。

いろいろ調べているのね。国政に関係を持つ人なのかしら。考え
るとため息を吐きたくなる。そんなのが嗅ぎ回っているのなら、面
倒事にでもなりそうだ。

「殺した理由、他にはないの？」

違う方に思考を持って行っていると、お姫様の声で呼び戻される。
出来ることなら、もう少し逃避したかったかも。

「無くは、無い。ですかね」

憎いのは元から。物心ついた時から、緋以外は敵だった。
死を与えようと思ったきっかけは…

「愚か者たち、緋に刃を向けようとしたのよ」
大切なものを、奪われそうになった。

アタシは色を持たない代わりに能力を持っていた。

あの子は能力の代わりに色を持っていた。

けれど周囲の者達は、あの子が能力を持っていないのに気が付い
ていなかった。

あの日までは。

「誰に唆されたのかわからないけど、能力の無い緋を殺そうと企ん
だのよ」

巫女とはいえど、能力の持たない緋は容易く殺すことが出来る。
神が護るのは色ではなく、能力。色持ちでしかない彼女は、人間で

も簡単に手を下せる。

「なぜ、緋が殺されそうになったのかも、どうして能力が無いことに気が付いたのかも、アタシにはわからないわ」

けれど、気づいたら人は燃えていた。自身のために使えないはずの“神の力”を使つて、彼らに制裁を下した。

自分でも深く覚えていない。

覚えているのは

皮膚を溶かしながら焦がしながら、いたぶるようにゆっくりと対象物を燃やしていく炎。

驚愕に見開かれた目と恐怖に脅え我を忘れた表情と、耳を塞ぎたくなるような人の叫び声。

怨み、憎悪、怒り、様々な負の感情を混ぜた表情を浮かべながら、狂ったように叫ぶ父という存在らしい男。

その全てを、燃やす炎とは正反対な……温かさを欠片も感じさせないような冷えた目で見ていたアタシだった。

*

全てを語り終え、気持ち落ち着けるようにゆっくりと息を吐き出す。あの時のことを思い出す度に、何故か心がざわつくのだ。

「もう、いいでしょう。これ以上、話せることはアタシには無い」
本当にもう無い。殺害理由を教えるはずが、いつの間にか少し話が脱線したように思える。まあ、言ってしまったものは取り消せるわけでもないのだから仕方がない。

空を見上げてみる。見て気付くくらいには、月が先程の位置から動いていた。

そろそろ侍従さんがお姫様探しに来る頃だろう。鉢合わせなど絶対にしたくないから、アタシも部屋に戻るうか。

そんなことを思い、「では、失礼致します」と丁寧にお辞儀をしてから元来た道を辿るとする。

しかし

「望むなら、願いを叶える」

体を半回転し、一步を踏み出そうとしたところで、お姫様の声が掛かった。

いきなり、何を言ってるんだ？

そう思うのは仕方がないと思う。

背を向けていた方に、また体を向け、突拍子も無いことを言い出した銀髪の少女を見る。その顔は相変わらず無表情で、何を考えているのかわからなかった。

「いきなり、何？」

「望むなら、願いを叶える」

訊いてみても、その一点張り。会話する能力は彼女には無いようだ。

仕方がないから別の質問をする。

「対価は？」

叶えてほしい願いが無いわけではない。しかし、何も無しにそんなことを言い出すはずがない、と思ったから訊いた。

すると、「するどい」と言いながら微かに笑う。ずっと無表情だった顔が、少しだけ動いた瞬間だった。

「あなたの血でいい」

「ち？」

思わず聞き返す。

ちつて、もしかして血のこと？

よく分からずに相手を見ていると、さっきよりも笑みを深くしたお姫様がアタシを指をさした。正しくは、アタシの身体を。

「あなたの身体を流れる、真つ赤な血。あなたを縛り、神の力を宿す、その血がいい」

今まで表情を変えなかった少女が、魅入られるほど可愛らしい笑みをアタシに向ける。

しかし、声からは感情が読み取れず、話の内容も相まって、見られるよりも先に恐いと思った。知らず、足がすくむ。

「なぜ、血を…？」

少しばかり声が震えた気がした。気がただけであって、実際どうであったかは自分ではわからない。

「それ以外の対価はいらぬ」

お姫様はというと、理由は答えずにそれだけを言う。

自分の望みが叶うという、甘い誘惑。対価は、己の血。

恐くないわけじゃない。むしろ、足がすくむくらい恐い。対価そのものというより、神子である一人の少女に恐れを感じた。

けど

「それで願いが叶うなら、血でもなんでもあげるわ。その代わりに、必ず叶えて」

本当に願いが叶うのなら、それぐらい、アタシにはどおってことない。使えるものなら、何でも使う。それが例え、偉大なる神子様であろうとも、だ。

アタシが条件を飲み込むと、お姫様は笑みを消し、無表情に戻ってから言った。

「約束。成悠の名に誓う」

その言葉に耳を疑いそうになった。

名に誓うことは、こちらとしては相手を信じられる行為だ。しか

し、誓った本人にはかなりの危険がある。誓いを破った場合、その人の心臓は活動を停止してしまう。

つまり、その約束に自分の命を賭ける、と彼女は言ったのだ。

「神子であるあなたが、なぜそんなことを…？」

正直、馬鹿じゃないのかと思う。巫女とはいえ、こちらはただの人間だ。そんなものに、信用させる為とはいえ、なぜ命を賭ける？なぜ、わざわざ危ない橋を渡るのだ。

アタシの内心を知ってか知らずか、事も無げにお姫様は言う。

「今のわたしは成悠。神子としてじゃない。産まれ落ちた人として誓う」

そして「気に入ったから」と、少女はまた僅かに笑った。

「あなたたちの生まれと終わり、珍しい。それに、緋も明も気に入ったから」

そう言っつて無邪気に笑うお姫様は、とても綺麗だった。月明かりが丁度良く銀色の髪に反射し、目が痛くならないくらいに優しく煌めく。

華奢な身体と可愛らしくも美しく容姿、地面につきそうなほどに長い銀色の髪。月に照らされた神子様は、より儂く、そして綺麗に見えた。

幻想的なその姿を、暫くの間、時も忘れてアタシは眺める。

「もうすぐ、始まる」

呟いた少女の声も言葉も、夢心地なアタシの耳には届かなかった。

12・3・明と成悠。(後書き)

読んでくださり、ありがとうございます。
本当にありがたいですし、嬉しいです。

さてさて、あと3日で一区切りつくのか。考えている本人が一番不安ですが、目標達成のためにも努力しようと思います。

これからも、お付き合いいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3085x/>

はじまりの物語(仮)

2011年12月28日00時46分発行